

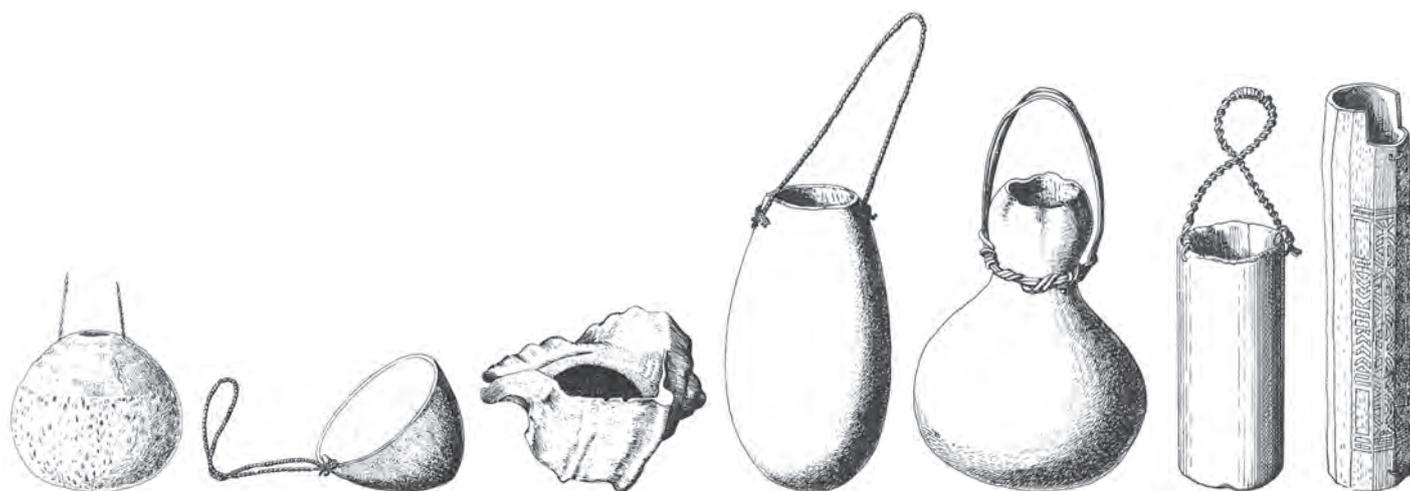
# パレオアジア

—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—

# 文化史学

*Cultural History of PaleoAsia*

計画研究 B01 班 2019 年度 研究報告



人類集団の拡散と定着にともなう

文化・行動変化の文化人類学的モデル構築

野林 厚志 編

表紙、裏表紙  
台湾原住諸民族の容器

出典

Chen, C. 1988 [1968] *Material Culture of the Formosan Aborigines*. Taipei: Southern Materials Center, Inc.

---

---

## 研究の目的と概要

本書は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」の領域を構成する計画研究班の中のB01班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の2019年度研究活動報告書である。

本年度は領域の研究計画の4年目であり、当初の計画にしたがいながら、生業活動、生産活動、象徴化、社会関係等に焦点をあてた、主としてアジア諸地域における民族誌的なフィールド調査を実施した。研究分担者、研究協力者はそれぞれの専門とする地域での研究を深めるとともに、他班に所属する研究者と共同研究や共同での成果発表を進めたのが本年度の成果の特色と言える。西アジアにおける生態資源の利用を、考古学遺跡の立地と現在の資源利用からアプローチした研究や、東南アジアにおける資源利用の多角化を植物利用の観点からとらえる試みは、人間の行動を直接とらえることができる文化人類学の強みをもって、本領域の研究に本班の参画者が貢献できたものと評価している。こうした個別の調査や研究は、本年度の下半期に開催した領域の研究大会につながっていった。12月に開催した第8回パレオアジア文化史学研究大会では、本班がホストとなり、ワークショップ「東アジア－東南アジアにおける人類の拡散：生態資源と利用法の多様性からのアプローチ」を開催し、現生人類の拡散の鍵を握ると言われてきた小石刃の東南アジア、東アジア地域における動態が議論された。

熱帯モンスーンから温帯森林にかけて環境差のある地域を対象に、1) 考古学的記録における利用資源（食料・道具）の特徴、2) 狩猟採集行動や植物資源利用行動の多様性、3) 古代西ユーラシア人と東アジア人の分岐（古代DNA等）の分析等を中心としながら、「小石刃がたくさんある地域」と「そうでない地域」の比較を通して、石器の違いを超えた共通性が資源利用をはじめとする文化的な行動から見えてくるかいなかを論点の一つとした。そこで交わされた議論を発展させながら、次年度の最終的な成果の構築にむけ、具体的な貢献のありかたを考えていきたい。

本班の運営、研究の進行にあたっては、評価委員の先生がた、領域内外の研究者のみなさまに多大にご指導いただいていた。心より感謝するとともに、引き続き、ご助力を賜ることを心よりお願いするしだいである。

計画研究B01班代表

野林厚志

国立民族学博物館・教授

---

## 研究組織

### 研究代表者

野林 厚志 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・教授

### 研究分担者

池谷 和信 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・教授  
上羽 陽子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授  
藤本 透子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授  
山田 仁史 東北大学 文学研究科・准教授  
山中由里子 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・教授

### 研究協力者

卯田 宗平 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授  
大西 秀之 同志社女子大学 現代社会学部・教授  
金谷 美和 国際ファッション専門職大学・准教授  
菊田 悠 北海学園大学 経済学部・准教授  
中谷 文美 岡山大学 大学院社会文化科学研究科・教授  
丸川 雄三 国立民族学博物館 人類基礎理論研究部・准教授  
吉田世津子 四国学院大学 社会学部・教授  
戸田美佳子 上智大学 総合グローバル学部・助教  
彭 宇潔 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・プロジェクト研究員  
高木 仁 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・研究支援員

## 目次

### 研究の目的と概要

#### アジアの新人文化における狩猟活動について

——アラビア半島の犬猟に注目して .....	池谷和信	1
------------------------	------	---

#### 道具としての植物利用(2)

——インドネシア東部 西ティモールを中心に .....	上羽陽子	5
	中谷文美	
	金谷美和	
	山岡拓也	

#### 器の形と文様に見る集団接触とモノの形態

——中央アジア陶器の事例から .....	菊田悠	13
----------------------	-----	----

#### 生業技術の変化の文化的解釈

——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察 .....	野林厚志	19
-------------------------------	------	----

ユーラシアの温帯草原における人の行動パターンとその痕跡 .....	藤本透子	25
-----------------------------------	------	----

東南アジア古層の神話・世界観と竹利用 .....	山田仁史	29
--------------------------	------	----

ブリコラージュされたモンスターたち .....	山中由里子	35
-------------------------	-------	----

#### 小規模居住集団の生活様式

——アフリカ熱帯林のバカ・ピグミーと中国雲南のドゥーロン族（独龍族）を事例に .....	彭宇潔	39
----------------------------------------------	-----	----

研究計画 B01 班 2019 年度研究活動 .....		45
------------------------------	--	----

研究計画 B01 班 2019 年度研究業績 .....		49
------------------------------	--	----

# アジアの新人文化における狩猟活動について —— アラビア半島の犬猟に注目して

池谷 和信

(国立民族学博物館、人類文明誌研究部)

## 1 問題の所在

旧石器時代における犬と人との関係については、論議が認められる (Shipman 2015, 池谷 2019)。犬は、現生人類の拡散にともなう新しいテクノロジーであるのか否かという課題である。はたして人類は、ネアンデルタールからホモ・サピエンスに移行して農耕や牧畜を開始するなかで、どの段階において家畜としての犬 (*Canis familiaris*) を創り出したのであろうか。

さて、今から3万5千年前に、シリアのドゥアラ洞窟から犬の下顎が見つかった (Suzuki and Takai eds. 1973)。この遺跡はネアンデルタール人の住居跡であるといわれており、その骨がオオカミのそれよりも小さいことから最も古い時代に家畜化された犬であるといわれる。また、犬の骨は、3万年前のウクライナの2つの遺跡においても発掘されている。これらは、旧石器時代に存在した犬であることを示す点では共通するが、犬の社会的役割については明らかにされていない。

本稿は、旧石器時代のアラビア半島を事例にして犬を使用する狩猟活動をみることから犬の社会的役割を把握することがねらいである。具体的には、犬と人と野生動物の描かれている岩絵を対象にして当時の狩猟方法について議論する。筆者は、これまでカラハリ砂漠の狩猟採集民サン (ブッシュマン) の社会に住み込んで、実際の犬を使用する槍猟に参与観察をしてきた (Ikeya 1994)。ここでは、狩猟の際に複数の犬の行動を観察する一方で狩猟の実際をとおして岩絵についての解釈を試みる。

アラビア半島において考古学的な犬の遺物は、紀元前4千年前に見つかっている (図1、2参照)。これは、紀元前6千年前の牛の遺物に比べて新しい。しかしながら、同じ地域における岩絵 (rock art) に焦点を当ててみると紀元前7千年前までにさかのぼることが可能である (図2)。例えば、シュワイミス遺跡 (Shuwaymis) では、岩絵の作成年代は新石器時代以前 (Pre-Neolithic) までさかのぼることができる。(図1、図2)



図1 調査地の位置

## 2 岩絵からみた先史時代の犬猟：アラビア半島の事例

以下、アラビア半島の北西部に位置するシュワイミス遺跡における個々の岩絵について紹介すると同時に、筆者 (池谷) による岩絵の内容に対しての解釈や疑問点を紹介する。

・事例1：図3参照 [Guagnina, Perrib, and Petraglia 2018: 230]

シュワイミス遺跡のパネルは中央部で損傷しており、大量の水流のために古代につくられた色合いが失われているところがある。パネルの右部には、13匹の犬との狩猟の様子が描かれており、左部にはハンターと、1頭の大きな馬科の動物、および8匹の犬が描かれている (犬の尻尾を参照)。なお、写真は、彫刻部分を白色でトレースしたもので、未完成な彫刻は白色点線で示している。

この岩絵から、筆者 (池谷) は弓矢猟の際に複数の犬が使用されていることがわかる。とりわけ個人のハンターが獲物を捕獲する際には、複数の犬が獲物の周囲を取り囲み獲物の動きを止めているようにみえる。これによって、ハンターは獲物に接近して捕獲することができるであろう。

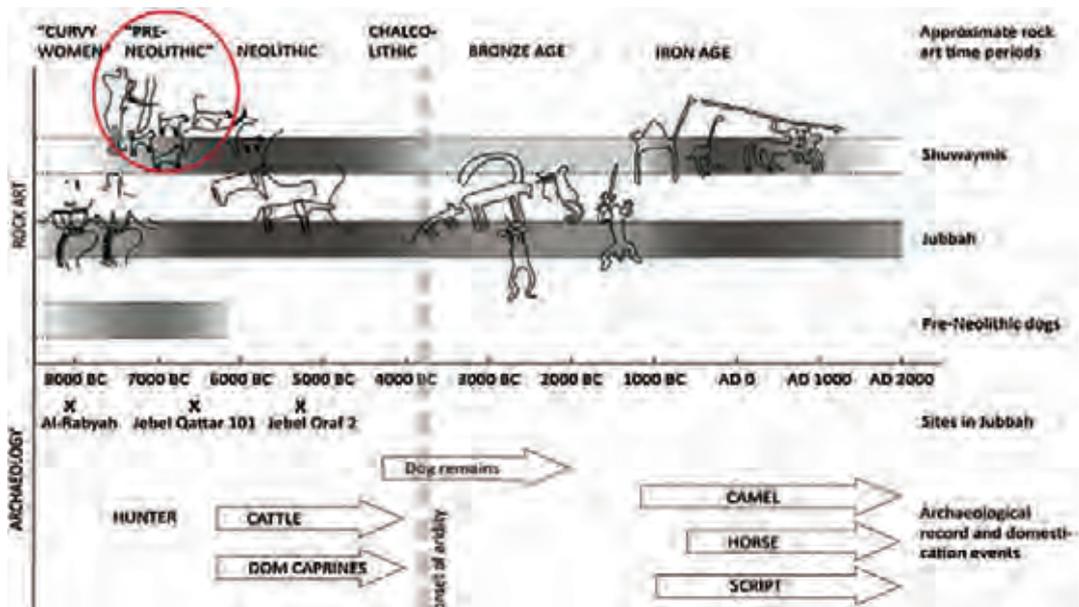


図2 アラビア半島における岩絵とその年代 [Maria Guagnin et al. 2018]



図3 事例1 [Guagnina, Perrib, and Petraglia 2018: 230]

- 事例2：図4参照 [Guagnina, Perrib, and Petraglia 2018: 231]

シュワイミス遺跡では、綱で繋がれた2匹の犬とさらに3匹の犬が、1頭の馬科の動物とその子供を狩猟する様子を描いている。パネルの上部の左部、また下部の右部、および中央は損傷しており、おそらく本来はさらに狩猟の様子が描かれていたと考えられる。

この岩絵から、筆者（池谷）は先ほどの岩絵に比べて弓矢猟の対象とされる獲物が犬の大きさと比較して大きく描かれていることがわかる。同時に、どうして2頭の犬が縛られているのか、その理由はよくわからない。さらに、ハンターと獲物の間に描かれているものは獲物の屠殺や皮剥ぎに用いられた道具の可能性が高い。



図4 事例2 [Guagnina, Perrib, and Petraglia 2018: 231]

- 事例3：図5参照 [Guagnina, Perrib, and Petragliaa 2018: 232]

シュワイミス遺跡では、パネルの一部で、2頭のアイベックス（中央と左）が8匹の犬に攻撃されている様子である。アイベックスの1頭は、つなぎなわにひっかかっているようである。もう1頭の3頭目のアイベックス（右）は、後に付け加えられたものであると推察される。



図5 事例3 [Guagnina, Perrib, and Petragliaa 2018: 232]

この岩絵から、筆者（池谷）はどのようにして複数の獲物があるのかについて疑問を持った。一般に犬猟においては、1頭の獲物を対象にするのが普通であって、一度に同時に2頭を捕獲するのは無理であろう。また、アイベックスの角の描き方に興味を持った。中央の獲物の場合には、曲線となる角の向きが野生のそれに比べて逆になっている。この理由は、よくわからない。

- 事例4：図6参照 [Guagnina, Perrib, and Petragliaa 2018: 232]

シュワイミス遺跡において、堤防西側からの一場面が描かれている。それは、3匹のガゼルが4匹の犬に狩られている様子を示す。



図6 事例4 [Guagnina, Perrib, and Petragliaa 2018: 232]

この岩絵から、筆者（池谷）はどのようにして複数のガゼルが犬によって足を止めているのかがよくわからない。それは、ガゼルの走る速さは犬のそれよりも早いと思われ

る。事例3と同様に、一度に同時に3頭の捕獲をするのは難しいであろう。この岩絵は、猟の場面ではないのかしれない。

- 事例5：図7参照 [Guagnina, Perrib, and Petragliaa 2018: 233]

シュワイミス遺跡において、このパネルではライオンと2匹の犬による狩猟の様子が描かれている。同時に写真では見えないが、さらに5匹の犬がライオンの下に彫られている。“Hanakiyah tools”がライオンの腹の下と、背中の上に彫られており、これらは動物の屠殺や皮剥ぎに用いられた道具だと考えられる。



図7 事例5 [Guagnina, Perrib, and Petragliaa 2018: 233]

この岩絵から、筆者（池谷）は雄のライオンは狩猟の対象であるのか、もしそうならば捕獲する意味は何かについて考えさせられる。ライオンは、その肉よりは毛皮の利用がみられた可能性は高い。

最後に、以上のようなこれまでの5つの事例を含むシュワイミス遺跡およびジュバ遺跡での完新世における各狩猟場面での犬の頭数を比較した（図8参照）。ここから、ジュバ遺跡では1-3頭のような小さな犬の群れが一般的であるのに対して、シュワイミス遺跡では1-2頭の小さ

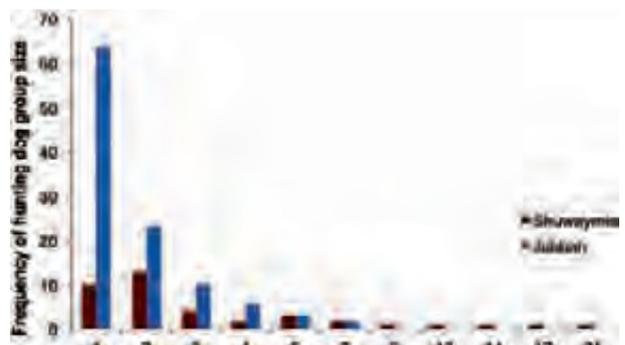


図8 Number of dogs per hunting scene (group size) [Guagnina, Perrib, and Petragliaa 2018: 233]

な群れから 17-21 頭の大きな群れまで犬の頭数は多様であった。2つの遺跡の違いの要因は何であろうか。大きな犬の群れを維持するには、より多くの犬の餌が必要である。それぞれの対象地の環境資源の大きさが関与していることになるであろう。

### 3 考察：岩絵に描かれた犬の解釈

ここで、これまでの岩絵に関する資料（事例 1 から 5 まで）をまとめてから、それに筆者によるカラハリ狩猟民を対象にした犬猟に関する民族誌データ・2 例を加えてみよう（表 1 参照）。この表から、以下のような点が明らかにされた。

- 狩猟対象は、馬科の動物、アイベックス、ゲムズボックのような大型動物とガゼルやジャッカルのような中型・小型動物に分けられるが、すべての猟において犬が使われていた。
- 猟に使用される犬の数は、4-5 頭から 10-15 頭までに及ぶ。つまり、数頭の犬がいなくては狩猟が維持できないと考えられる。
- 野生動物を対象にして犬を使用する狩猟法は、弓矢猟が中心であるとはいえ、槍猟や棒で殴る猟まで多様な形がみられる。但し、先史時代のハンターは常に弓と矢を持っていたことから、当時、弓矢猟の際に矢尻に塗られる毒が開発されていた可能性がある。

以上のように先史時代（とくに旧石器時代）の岩絵に描かれた犬猟に関する細やかな状況を、筆者が関与した現在の民族誌の視点から解釈を試みた。今後は、様々な

犬猟の民族誌を参照することからさらなる新しい解釈が生まれるであろう（Lupo 2017 参照）。同時に、個々の犬がどのように生存を維持してきたのかが気になる点である。民族誌の事例から犬の食料が十分に存在することが犬の群れを保つには不可欠であったと指摘されており、先史時代においても類似の構造が働いている可能性がみられる。

#### \*参考文献

- 池谷和信  
2019 「犬を使用する狩猟法（犬猟）の人類史」大石高典・近藤祉秋・池田光徳編『犬からみた人類史』46-67 頁、勉誠出版。
- Ikeya, K.  
1994 Hunting with Dogs among the San in the Central Kalahari. *African Study Monographs* 15 (3): 119-134.
- Lupo, K. D.  
2017 When and where do dogs improve hunting productivity? The empirical record and some implications for early Upper Paleolithic prey acquisition. *Journal of Anthropological Archaeology* 47: 139-151.
- Guagnin M. et al.  
2018 Pre-Neolithic evidence for dog-assisted hunting strategies in Arabia. *Journal of Anthropological Archaeology* 49: 225-236.
- Shipman, P.  
2015 *The Invaders: How Humans and Their Dogs Drove Neanderthals to Extinction*, Harvard University Press.
- Suzuki H. and F. Takai eds.  
1973 *The Palaeolithic Site at Douara Cave in Syeria*. Part 1 Univ. of Tokyo, Bull.5.

表 1 アラビア半島の遺跡とカラハリ砂漠における犬猟

場所	動物種	犬の数	ハンターの数	狩猟法
1 Shuwaymis	1 馬科	8	1	bow and arrows
	なし	13	1	bow and arrows
2 Shuwaymis	1 馬科	5	1	bow and arrows
3 Shuwaymis	2 アイベックス	8	0	bow and arrows
4 Shuwaymis	3 ガゼル	4	0	bow and arrows
5 Shuwaymis	1 ライオン	2	1	bow and arrows
6 カラハリ砂漠	1 ゲムズボック	10	4	spear (Ikeya 1994)
7 カラハリ砂漠	1 ジャッカル	15	1	stick (Ikeya 1994)

出所：筆者作成

# 道具としての植物利用(2)

## —インドネシア東部 西ティモールを中心に

上 羽 陽 子 (国立民族学博物館)  
 中 谷 文 美 (岡山大学)  
 金 谷 美 和 (国際ファッション専門職大学)  
 山 岡 拓 也 (静岡大学)

### 1. 本研究の背景と目的

本研究は、民族学的視点から、インドネシア、ティモール島西部（西ティモール）におけるヤシ科植物の採取・加工・利用を具体的に示すことを通じ、道具資源としての植物利用にかかわる研究の可能性を示すことを目的としている。

本研究の背景には、「タケ仮説」をめぐる議論がある。更新世から完新世前半の東南アジアにおいて、不定形な剥片や石核石器が継続する理由のひとつは、タケなどの植物を道具資源として利用していたことと考えられている。この「タケ仮説」は、1) 資料として残りづらく、直接観察できない対象である植物資源の利用を議論の俎上に載せ、2) 与えられた環境条件によって利用する道具資源の種類や利用方法の性質が異なることを指摘した点において、初期現生人類の柔軟な適応能力を理解するための重要な視点を提供したといえる（山岡 2018）。

しかし、初期現生人類の行動上の特性を考えるためには、タケなどの植物が利用されていたかどうかということだけではなく、どのように利用されていたのかについても検討されるべきである。また、タケ以外の植物の利用にも広く目を向ける必要がある。植物質の遺物は発見されていないため、どのような植物資源の利用があり得たのかについては、民族誌調査から情報を得、研究の見通しを持つことも有用である。近年の研究では、東南アジア地域における石器の使用痕分析や残渣分析などに加え、現存するコミュニティの植物利用に関して過去への応用を念頭に置いた調査も進められている（Xhaufclair *et al.* 2016; 2017）。

### 2. 調査対象と研究の方法

本研究の調査対象地は、インドネシア共和国東ヌサ

トゥンガラ州の西ティモール（ティモール島西部）である。西ティモール地域は標高 400～2500 m に位置し、年間降水量 900～2000 mm のサバナ気候である。乾期と雨期が明瞭で、多様な有用植物が混植された混合樹園地が発達している。この地域に居住するアトニ・メト（Atoni Meto）は、西ティモールにおいてもっとも人口の多い民族集団（約 80 万人）で、オーストロネシア語族に属し、言語はウアブ・メト（Uab Meto）語（ダワン Dawan と呼ばれる）である。主たる生業は、焼畑農耕（shifting cultivation）によるトウモロコシ・イモ類（キャッサバ、サツマイモなど）の栽培、地域によっては水田耕作によるコメ栽培、森林地帯ではワナ猟や吹き矢猟である（McWilliam 2002: 25-39）。アトニ・メトの人びとは、ヤシなどの森林資源を用いて農耕具、家畜飼養具などを製作している。とりわけヤシの利用が多く、ヒモヤカゴ、ゴザなどから家屋の屋根や壁、建材に至るまで多様な展開がみられる。

筆者等は、西ティモールにおけるヤシ利用に関する民族誌調査を実施した。調査内容は、ヤシを用いた生活用具に関する悉皆調査、ヤシ伐採とヤシを用いた生活用具の制作工程の観察、ヤシの伐採道具と加工道具の熱覧調査である。

### 3. 明らかになったこと

上記の調査から、現時点で明らかになっているのは、以下の 3 点である。

#### 1) 多様な生活用具を 6 種類のヤシの使い分けによって製作していること

今回考察対象とするヤシ科植物は単子葉植物のため、維管束の構成がタケやイネとほぼ同じである。広葉樹の葉と異なり、1) 葉の表皮が厚く 2 重ないし 3 重になって

いるものが多い、2) 太い維管束繊維を持っている、3) 維管束繊維が箱状の構造をつくっているといった特徴がある(阿部 1994; McCurrach 1959)。西ティモールの調査対象地では、タラバヤシ (*Corypha utan*)、パルミラヤシ (*Borassus flabellifer*) を含む6種類のヤシ科植物を用いて、建材からカゴ、結束具に至るまで、各種用途に適した多種類の生活用具を製作している(図1)。

現地名	和名	学名
tune	タラバヤシ	<i>Corypha utan</i>
tua	パルミラヤシ	<i>Borassus flabellifer</i>
puah	ビンロウ	<i>Areca catechu</i>
bone	サトウヤシ	<i>Arenga pinnata</i>
noah	ココヤシ	<i>Cocos nucifera</i>
ua	トウ	<i>Calamus sp.</i>

図1 調査対象地におけるヤシ科植物



図2 屋根材(タラバヤシの葉)



図3 箕(ココヤシの葉)

たとえば、タラバヤシ(現地名:tune、学名:*Corypha utan*)の葉による屋根材、ココヤシ(現地名:noah、学名:*Cocos nucifera*)の葉による箕、ビンロウ(現地名:puah、学名:*Areca catechu*)の葉鞘による簡易容器、パルミラヤシ(現地名:tua、学名:*Borassus flabellifer*)の葉柄による、壊れたひしゃくを修理するための結束具などである(図2~図5)。



図4 簡易容器の製作(ビンロウの葉鞘)



図5 壊れたひしゃくを修理するための結束具(パルミラヤシの葉柄)

2) 特定の部位に異なる加工を施すことによって、多彩な生活用具を生み出していること

調査地ではタラバヤシの葉の部分を用いて、以下のような生活用具を製作している。

①ヒモ (図6)

タラバヤシの葉を採取し、そのままヒモとして使用する。たとえば、焚き木を採取して運ぶ時に、束ねてまとめるためにつかわれる。その他、ポリタンクを吊して固定しておくため、ニワトリなどの家畜の足を固定するためなど、一時的に固定する際に用いられる。



図6 タラバヤシの葉で焚き木を束ねて運ぶ

②カゴの編み材 (図7～9)

タラバヤシの葉を採取し、カゴの編み材として使用する。葉は採取するだけで約170cmの長さを持つ編み材となる。さらに、柔軟性と弾性があることから



図7 タラバヤシの葉を組んでカゴの底面をつくる



図8 把手部分も同じ葉を用いて巻き上げながらつくる



図9 雌鳥が卵をかえすために入るカゴ

カゴ編みに適している。カゴの編み材として土台から結束、把手まで、すべてのカゴ部分を葉のみで製作可能である。カゴは雌鳥が卵をかえすために用いられる。

③ 縛ったヒモ (図10～16)

タラバヤシの未展開幼葉を採取し、固い葉脈部分を取り除くと、葉が一枚ずつに分離する。分離した葉の内皮と外皮の間にタケでつくった小刀の刃先をいれ、さらに分離させて、内皮を取り出す。タケの小刀をもちいることで、金属製の刃物とは異なり、繊維にダメージを与えずに内皮と外皮に分離させて、剥がすことができる。取り出した内皮を縛ってヒモを製作する。さらにこのヒモは、編み袋を製作する際にも使用される。



図10 タラバヤシの未展開幼葉を採取する



図 11 未展開幼葉の葉脈部分を取り除いて葉を一枚ずつに分離する



図 12 葉の内皮と外皮の間にタケ製小刀の刃先をいれ、内皮を取り出す



図 13 タケ製小刀



図 14 タケ製小刀



図 15 取り出した内皮



図 16 足をつかってヒモを織う

#### ④針（図 17）

織ったヒモの製作工程で取り除かれた葉脈部分を用いて針を製作する。針穴はなく、針の上部に切り込みをいれ、その部分に繊維類を入れ込んで使用する。この針はたとえば、タラバヤシの葉による雨よけのカサの葉の隙間を縫うために用いられる（図 18・19）。

このように、タラバヤシの葉部分の利用をみただけでも、異なる種類のヤシの異なる部位を、それぞれの特性



図 17 タラバヤシの葉脈による針



図 18 タラバヤシの葉による雨よけのカサ



図 19 雨がはいつてこないように葉の隙間を縫いとめる

に応じて異なる用途に用い、そのうえ特定の部位に異なる加工を施すことによって、多彩な生活用具を生み出していることが明らかとなった。

さらに特筆すべきは、これらの製作物が、一定期間の使用に耐えるだけの耐久性ばかりでなく、用途に適した機能を備えていることである。例えば、このタラバヤシの葉によるひっぱり張力の実験（万能試験機：オートグラフ AG-X plus）をした結果、試験力は 26 kgf であった。一般的な PP 紐の試験力 14 kgf よりもひっぱりに対して耐える力が強いことが明らかとなった。つまり、組む、捻る、絢うなどの加工をほどこさなくても、葉の状態ですでに一定の強度が備わっているのである。そのため、他の種類の道具やより複雑な加工技法をもちいる必要がない。つまり、適性を理解した植物利用がそれ以上の複雑化・進化を必要としない状況で、複合的な生業をなってきたせながら継続してきたといえる。

### 3) ヤシとタケとの組み合わせにより、多様な道具利用の可能性があること

ヤシについては、「ヤシはタケと同じく割裂しやすく耐腐性があるので、建築資材や細工物に適している。その大きな葉を屋根や壁にするニッパヤシは有名だ。サトウヤシ・アブラヤシ・サゴヤシ・ナツメヤシなど、食用植物として多方面に利用される。したがって、ヤシを 2、30 本も所有しておれば、島々ではまず生活に困ることはない。ヤシ一本はタケ数百本分相当する」（沖浦 1991:15）と素材としての有用性が指摘されている。これまでの筆者等の民族誌調査においても、タケが生活用具の素材として有用なことは、アッサムでのタケ利用の実態を通じてすでに指摘してきた（上羽他 2019）。

そこでヤシとタケの道具利用を比較してみると、以下の通りと考えられる（図 20）。

ヤシ	タケ
石器の代用品にはならない	石器の代用品になりうる可能性はある
製作や加工に複雑な道具や技術を必要としない	
糸・布・ヒモ・カゴなど多様	糸・布には不向き
<p>・ヤシとタケとの組み合わせでは、より多様な道具利用の可能性はある。狩猟具、運搬具、シェルターなど生活全般に対応可能。</p> <p>・ヤシとタケだけではなく他の単子葉植物の利用にも広く目を向ける必要がある</p>	

図 20 道具利用におけるヤシとタケの比較

- ①ヤシは石器の代用品にはならないが、タケは代用品になりうる可能性がある。
- ②ヤシ、タケともに製作や加工に複雑な道具や技術が必要としない。
- ③ヤシは糸・布・ヒモ・カゴなど多様な生活用具が製作可能。一方、タケは糸・布の製作には不向き。

このように、ヤシとタケとの組み合わせでは、より多様な道具利用の可能性があることが明らかとなった。それらは、狩猟具、運搬具、シェルターなど生活全般に対応可能である。さらに今後は、ヤシとタケだけではなく他の単子葉植物の利用にも広く目を向ける必要がある。

#### 4. まとめ

本研究では、西ティモールでの民族誌調査に基づいて、ヤシ科植物の採取・加工・利用を具体的に示し、道具資源としての植物利用にかかわる研究の可能性を示した。

近年の研究では、ヤシやタケの繊維を剥いで（削いで）柔らかくする工程で石器を使用すると、石器の表裏の広い範囲にハケ目状の線状痕が残されることが示されている（Xhaufair 2014）。これまでの実験使用痕分析では、操作方法として「切る」、「掻き取る」、「削る」、「鋸引き」、「穿孔」などを主に想定して研究が進められており（御堂島 2005）、繊維を「剥ぐ」という石器の操作方は想定されていなかったように思われる。繊維を「剥ぐ」ことで石器に生じる痕跡は、これまで想定されてきた操作方法で石器に生じる痕跡と区別できる可能性がある。

ヤシの葉から多様な生活道具を製作する際には、剥ぐという行為が必要となる。つまり、撚ったり絢ったりするときには、一定程度、繊維を薄くする必要がある（図 21）。繊維を薄くするために、石器をねかせて使用することになるので、石器の表面と裏面の広い範囲にハケ目状

の線状痕が残されると考えられる。本調査の観察・記録に基づく考察は、そうした石器の使用痕跡が、撚る・絢うなどの行為を経て、糸・布・ヒモ等を製作していた（間接的）証拠になりうることを示している。

このような剥いだ繊維は何を製作し、どのように利用されていたのだろうか。それらを推察するためには、本研究のような植物に関わる「採取・加工・利用」の現場をおさえる民族誌調査を継続し、過去の植物利用の実態に迫ることが必要となる。それとともに、このような考古学と文化人類学との連携研究をかさねることにより、類似した石器の使用痕跡が、その他の作業内容やその他の被加工物を対象とした加工作業で生じないか、検証していく必要がある。

※ 2018年西ティモールにて図2～図8、図10～19は上羽陽子が撮影、図9は金谷美和撮影。

#### 参考文献

阿部登  
1994 「ヤシの葉の構造とその耐久性」『Sago Palm』 Vol.2, No.1, pp.7-12.

上羽陽子・金谷美和・中谷文美  
2019 「道具としての植物利用—インド北東部アッサム地域を中心に」野林厚志（編）（『パレオアジア文化史学』B01 班研究代表者）『パレオアジア文化史学—アジア新文化形成プロセスの総合的研究—』パレオアジア文化史学（B01 班 研究報告書）、文部科学省学術研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020 年度計画研究 B01 班（研究課題番号 16H06411）、pp.5-9.

沖浦和光  
1991 『竹の民俗誌』東京：岩波新書。

御堂島正  
2005 『石器使用痕の研究』東京：同成社。

山岡拓也  
2018 「タケ仮説と初期現生人類の行動的現在性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第6回研究大会』、p.56.

McCurrach, M.  
1959 *The Palm of the World*. New York: Harper & Brother.

McWilliam, A.  
2002 "Place and people in West Timor." In McWilliam, A. *Paths of Origin, Gates of Life: A study of place and precedence in Southwest Timor*. pp.25-47, Leiden: KITLV Press.

Xhaufair, H.  
2014 *Plant Use in the Subsistence Strategies of Prehistoric Hunter/gatherers in Palawan Island Assessed from the Lithic Industry*. Building up a Reference Collection (PhD thesis). Paris: Muséum National d'Historie Naturelle.

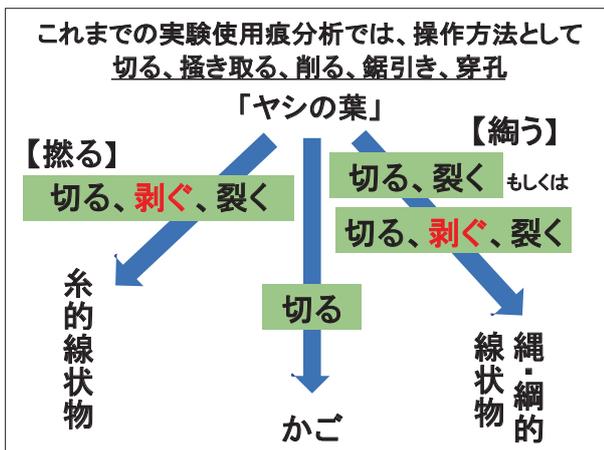


図 21 ヤシの葉の加工技術

Xhaufair, H., A. Pawlik, C. Gaillard, H. Forestier, T. J. Viales, J. R. Callado, D. Tandang, N. Amano, D. Manipon and E. Dizon

2016 "Characterisation of the use-wear resulting from bamboo working and its importance to address the hypothesis of the existence of a bamboo industry in prehistoric Southeast Asia." *Quaternary International* Vol.416, pp.95-125.

Xhaufair, H., N. Revel, T. J. Viales, J. R. Callado, D. Tandang, C. Gaillard, H. Forestier, E. Dizon, and A. Pawlik

2017 "What plants might potentially have been used in the forests of prehistoric Southeast Asia? An insight from the resources used nowadays by local communities in the forested highlands of Palawan Island." *Quaternary International* Vol.448, pp.169-189.

# 器の形と文様に見る集団接触とモノの形態 ——中央アジア陶器の事例から

菊田 悠

(北海学園大学)

## 1. はじめに

器(うつわ)―主に食器―は、飲食や調理、食料の保存、運搬などに欠かせず、古くから石や木、葉などの自然物が用いられていたと思われる。土を成形して作った土器は一般的に新石器時代になってから使用が始まったとされており、その意味では旧石器時代の分析に、土器づくりや、さらには現在見られる陶器づくりをそのまま適応できるわけではない。しかし、器や道具などの日常生活で使われているモノの特徴が何によって生じ、地域によってなぜ違いが生まれるのかという問題は、パレオアジア研究における石器の分布の社会・文化的な意味の考察にも適応可能であろう。したがって本報告では、これまでパレオアジア研究班でおこなった資料収集と現地調査によって得られたデータをもとに中央アジア産陶器の形と文様の変化、地域ごとの特徴を分析し、これらの違いがどのような要因によって生じるかを考察してみる。それにより、パレオアジア研究における以下の論点に多少なりとも答えることを試みたい。

- a. どのような生態学的な要因が、モノの材質や形態を決めるのか？
- b. モノの形態の違いは、社会集団の違いを意味するのか？
- c. 集団間の交流は、どのようにモノの形態に表れるのか(あるいは表れないのか)？
- d. 革新的技法が導入されると、それがどのように広まっていくのか？

## 2. どのような生態学的な要因が、モノの材質や形態を決めるのか？

現在のウズベキスタン領を中心とした中央アジア南部のオアシス地域では、古代から土器が使用されており、8世紀以降になって、土器に水をはじき光沢を与える釉を塗って焼成する施釉陶器が盛んに生産されるようになった。その生産拠点は、施釉陶器の原材料、特に陶土が豊

富で釉薬や顔料の入手が容易な地域に設けられた(地図1参照)。したがって、陶器に関しては原材料の入手が比較的やすい(距離的に近い)地域であることが、生産するうえで重要な要素であることがわかる。陶器は強い衝撃を与えると壊れてしまうため、原料の採集地と製品の生産地が近接することはやむを得ないだろう。

一口に陶土といっても、その特徴は材質によってさまざまに異なる。例えばホラズム地域のカタボグで産出する陶土の特徴は、焼成時の収縮率が非常に低いことである。一般に陶土に長石、雲母、鉄化合物、石灰石などが多く含まれるほど、器の焼成時の収縮率は大きく、アルミナ、石英などの耐火物質が多いほど、収縮率は小さい。カタボグの陶土は後者にあたり、重くずっしりとした食器が出来る(菊田 2019)。一方で、フェルガナ地域のリシトンでは、市内一帯に堆積した赤土が軽く丈夫な器の原料として重要であるものの、これのみでは収縮率が高く壊れやすいため、油っぽい土や葦を細かく切ったものなどさまざまな物を配合し、よく練って陶土にする(菊田 2013、Rakhimov 1961)。しかし、カオリン質を含まず1000度以上の高温焼成に耐えがたいため、磁器にはなりえない。14世紀半ばから15世紀にティムール朝の王侯らが中国製の青花磁器を珍重した際に、中央アジアの陶工たちは、カオリンのかわりに多孔質ケイ酸塩(シリカ)を混ぜた地元陶土を用いて磁器に近づけた製品(軟質磁器)を作り出し、模様も似せたものが流行った(Alieva 2009)。だが、中央アジア産のほとんどは青花磁器よりも素朴で暖かい色合いの器体に、同じモチーフでも一つ一つ職人の筆づかいが異なる個性豊かな文様が描かれており、冷たい白地に均質で厳格に統一された飾りが描かれる青磁とは明らかに異なる製品となっている。カオリン質の有無という生態学的な違いが、決定的に器の性質を異なるものとしている上に、職人が器に向かうときの心得(例えば、画一化された模様を正確に描くべきか、その場の自由な閃きのままに描くことを良しとするか)や工房の形態などもおそらく全く違うものであったのではないかと推測できる。



地図1 現代ウズベキスタンの施釉陶器の主な産地（菊田 2019：14-15）

### 3. モノの形態の違いは、社会集団の違いを意味するのか？

中央アジアの陶器に関して、「モノの形態の違いは、社会集団の違いを意味するのか？」という疑問に対しては次の事例を挙げることができる。

- (1) 地域的な形態の違いが、何世代も受け継がれている  
 例一ホラズム地域の深皿パディヤ (badiya) —  
 ウズベキスタン西部のホラズム地域ではパディヤとい

う特徴的な皿がある（図1参照）。パディヤは上部が開いた平皿で、中央部が盛り上がり、小さな台座が付いていることが多い。この皿に中央アジアの代表的な料理であるオシ（玉ねぎ、にんじん、肉を焼いて米を加えて炊くピラフ）を載せると、肉脂は皿の端に流れていき、皿中央部のオシは脂分が少なくなる。人々は栄養豊富でおいしい皿の端か、中央部の脂分の少ない部分かを選びながらオシを食べることができる。

このパディヤは現在に至るまで、ホラズム地域にのみ特徴的な平皿である。中央アジアの他の窯元でもオシを



図1 パディヤ（<http://makuha.ru/remeslo/012-uzkeram.htm> より）

頻繁に食するが、バディヤを導入することはなかった。ソ連時代から首都タシケントではさまざまな出身地の人々が混住しており、「ホラズムではバディヤでオシを食べる」ことを知っている者も少なくないはずだが、非ホラズム出身者でバディヤを使っている者や、バディヤを紹介しても日常で使おうとする者を筆者は見つけることができなかった。脂分を嫌って、平皿の下に別の皿などを入れて傾けて脂を一か所に集める人々も、「バディヤは便利そうだがホラズムのものだから（自分の地域のものではないから）」「バディヤはオシには良いかもしれないが、平皿はオシ以外のさまざまな料理に使えるのもっとよい」などと言って、あえて使用しようとはしない。バディヤは、モノの形態の違いが地域的社会的集団の違いに重なる例だと思われる。

#### (2) 異なる社会集団が接触しても、モノの形態が変化しない例—食器の形—

中央アジア陶器は大きく2種類に大別される。平皿やボウル、茶碗のように上部が開けているものと、水差しや壺のように細長いものである。興味深いことに、これら中央アジアの食器の主な種類と形は9-13世紀と、20世紀初頭でほとんど変化がない。その間、支配王朝は次々と入れ替わり、特に13世紀初頭のモンゴル侵入時にはアフラシアブを始め中央アジア各地の陶器の窯元が破壊され、陶器の質量は大きく低下した。だが、やがて復興した窯元はかつてと大差ない形態の食器を作っている (Alieva 2009)。

これは第一に、支配者（主に遊牧民出身）が変わっても、窯元に陶業に携わる職人集団にはあまり変化がなかったからと推測される。遊牧民の支配者層が、課税対象である定住民の職人家業に加わることは考えにくいのである。ゆえに、異なる社会集団が接触した際、生業が違っており、そこに支配・被支配の構造が重なっていた場合は、モノを作る集団の構成に変化は起きにくく、モノの形態もあまり変わらないと考えられる。

また、支配者層が別の地域から新たに陶工職人を連れてきて（特にティムール朝時代にはイランなど各地から優れた職人が首都サマルカンドに連れてこられたとされている）、上述の軟質磁器のような新たな製品や多くの建築飾り用タイル（図2参照）を生み出しても、食器の基本的な形は受け継がれている。これについては様々な説明が考えられるが、最もありうるのは、9-13世紀初頭の中央アジアの食器は北アフリカや中東地域にも広く輸出されるほど高品質で洗練された域に達しており、それ以上のイノベーションが起りにくかったからではないだろうか。また、平皿あるいは壺というかたちは食料を置



図2 ティムール朝のサマルカンドにおける建築タイル（菊田2019：11）

いたり保存したりという食器の主な用途に対して汎用性が高く、異なる社会集団が新たな食習慣を持ち込んでも対応しやすく既存のままでいられたのではないだろうか。この場合は、社会集団が異なってもモノの形態の違いに結びつかない例といえる。

#### 4. 集団間の交流は、どのようにモノの形態に表れるのか（あるいは表れないのか）？

中央アジアにおける食器の形は時代ごとにあまり変化がなかったものの、それを彩る文様は時代や地域ごとにさまざまな変化を見せた。そこには集団間の交流が反映されている。以下ではウズベキスタン芸術アカデミーの学者S.アリエヴァ（2009）の著作に沿ってこの点を整理してみる。

9世紀の中央アジア産陶器の文様は、イスラーム化以前の特徴と、7-8世紀のイスラーム化後の特徴が両方見られる過渡期といえる。9-13世紀の主要な中央アジアの窯元はアフラシアブ、ブハラ、チャーチュ（タシケントの古名）、フェルガナ、ホラズムなどで、そこでは食器に植物柄、幾何学模様、鳥や動物、人間、言葉、想像上の生き物などが描かれた。このうち、イスラーム化以前のソグド時代からの伝統である動物柄は、11世紀初頭には徐々に抽象化し、頭だけになったり、鳥の羽がアーモンドの形に解釈が変わったりした。ニシャープールとアフラシアブでは9世紀末-10世紀に飛んでいる鳥柄が流行

したが、やがて11世紀に抽象化し、鳥や動物はふっくらした植物のカールになり、縁取りの動物柄はアラビア文字の文章や言葉に変化した(図3参照)。偶像崇拜を嫌うイスラームの教えが反映されたためと考えられている。そして、このようなイスラーム化した文様の食器は北アフリカや中東に広がるイスラーム圏に盛んに輸出され、マーワラーアンナフル(アムダリア河以北を意味し、現在の中央アジア南部、主にウズベキスタン領にあたる)のスタイルとして知られていた。

ただしシルダリア河中流域のオアシス都市チャーチュは、オアシスとステップの間の交流地で商業上の重要な町であり、そこで生産された陶器の文様にはオアシス定住民のみならず、ステップに暮らす遊牧民の影響も見られるという。具体的には、当時のマーワラーアンナフル各地で使われた花のブーケ、ヤシの木、ザクロ、解読不能な図柄と化したアラビア文字などのイスラーム圏スタイルに加えて、チャーチュ独自の三角や星模様、動物、鳥、魚、想像上の生き物などユニークな文様があった。マーワラーアンナフルの統一スタイルの中心的窯元であったアフラシアブに比べて、植物柄や幾何学文様は少なく、動物はあまり抽象化せず自然の姿に近く描いていた。チャーチュの動物柄はステップ草原の手工芸で用いられるアップリケに近い描き方で、用いられる色もアフラシアブのものとは異なっていた。

ところが、アフラシアブ陶器も12世紀から13世紀にかけては遊牧民起源のテュルク系支配者層の増加に伴ってアラビア文字文様が減り、代わりに幾何学文様が増えていた(Alieva 2009)。

このように中央アジアでは、集団間の交流が、イスラーム的な文様の浸透、遊牧民の文化の影響といったかたちで陶器の文様に現れた。また、モンゴル侵入以前のシル



図3 アラビア文字を装飾に用いた陶器(菊田 2019: 10)

クロードを通じた交易が盛んであった9-12世紀時代とティムール朝がマーワラーアンナフル全体を統一した時期には「マーワラーアンナフルの共通スタイル」とでもいべき統一的な文様が地域全体で見られたが、17世紀以降は交易の衰退と3ハン国の争乱が絶えなかったことから、各窯元の陶器はローカルな特徴を強めた。

## 5. 革新的技法が導入されると、それがどのように広まっていくのか?

ティムール朝の支配者層が中国磁器に憧れたことから始まったサマルカンドの軟質磁器(図4参照)は、カオリンなしの陶土を磁器に近づけるという革新的技法であった。これはその後、19世紀にウズベキスタン東部に位置するリシトンで盛んに生産されるようになり、町にはチニガロン・マハツラつまり「軟質磁器を焼く人々の地区」と呼ばれる地域が出来て、質の高い軟質磁器を産出した(Peshchereva 1959: 202)。

リシトンの軟質磁器はどこからどのように伝わったのかに関しては諸説ある。19世紀にプハラヤマシュハドからこの技法を学んできた者がいたという説や、現中国領であるカシュガルへ陶業を学びに行き軟質磁器を持ち帰った陶工の話が伝承されている。特に後者の技術はリシトン在住のカリ・アブドゥロ親方がさらに発展させて独自のレシピを確立しその製法を独占していたという(Peshchereva 1959: 230, Rakhimov 1961)。ただしこの革新的技法は親方の後継者となる息子や甥などの一族の男性陶工、あるいはごく近い弟子にのみ伝えられており、カリ・アブドゥロ親方には娘しかいなかったため、後継者を残さなかったという逸話も、広く知られている。

一方、20世紀半ばにはウズベキスタンの首都タシケントで政権の指導のもと、近代的な工場と学校が作られ、陶器の新しい成形法や磁器、顔料などを導入し、ウズベ



図4 中央アジア産の軟質磁器(菊田 2019: 11)

キスタン各地の窯元から職人たちを研修に招いて、近代的な技術を広めようとした。リシトンでもろくろではなく型を用いた成型、手作業ではなく土練り機を用いた陶土づくり、新しい化学的釉や顔料などは、このタシケントの研修で学んできた職人たちによってリシトンに設けられた国营工場を通じて広く普及した。

## 6. まとめ

以上の考察から、冒頭の問いに対する答えを簡潔に記し、まとめとしておこう。

- a. どのような生態学的な要因が、モノの材質や形態を決めるのか？

中央アジア陶器に関しては、原材料の得やすい土地が産地となっていており、モノの材質にも原材料が近くで採れるかどうか非常に重要である。

- b. モノの形態の違いは、社会集団の違いを意味するのか？

この点に関しては3種の事例があった。モノの形態が社会集団の違いと重なるバディヤの例、陶器生産する被支配集団が支配者層の変化によっても前代と同じ形態のモノを作り続けた事例、他地域から連れてこられた陶工集団でも前からの陶工が作っていたのと同じ形態のモノを作り続けた事例である。

- c. 集団間の交流は、どのようにモノの形態に表れるのか（あるいは表れないのか）？

中央アジアでは陶器の文様から、イスラーム化の浸透という社会変化、ステップの遊牧民とオアシス定住民の交流などを読み取ることができる。また、地域全体の交易が盛んで政権が安定した時期には

「マーワラーアンナフルの共通スタイル」とでもいべき統一的文様が地域全体で見られ、地域間の紛争が絶えず交易がしにくかった時代には「共通スタイル」は衰えて、各窯元の陶器はローカルな特徴を強めた。

- d. 革新的技法が導入されると、それがどのように広まっていくのか？

リシトンへの軟質磁器の導入事例では、個人で先進地域に行って革新的技法を身に付けてきた者が、周囲にそれを伝えるというかたちが見られた。ただしこれは親族男性もしくは近い弟子にのみ伝えられたため、息子を持たず、次世代に優れた技法を伝えることがなかった陶工もいた。近代では、各地の窯元から数人を選別し、革新的技法を研修で教え込んで帰し、地元を広めさせるという手法が採られた。

## 参考文献

菊田悠

2013 『ウズベキスタンの聖者崇敬—陶器の町とポスト・ソビエト時代のイスラーム』 風響社.

2019 『ウズベキスタン陶芸紀行—よみがえるシルクロードの窯元』 共同文化社.

Alieva, S.

2009 *Khudozhestvennaya polivnaya keramika Uzbekistana IX-nachala XXI v.* Tashkent: Izdatel'stvo zhurnala "SAN'AT".

Peshchereva, E. M.

1959 *Goncharnoe proizvodstvo Srednei Azii.* Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR.

Rakhimov, M. K.

1961 *Khudozhestvennaya keramika Uzbekistana.* Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk UzSSR.

# 生業技術の変化の文化的解釈

## ——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察

野 林 厚 志

(国立民族学博物館)

### 目的

本報告は、インドネシアのハルマヘラ島に居住するガレラ族の漁船の形態の調査結果を示しながら、生態資源の獲得手段における新たな技術の導入が、集団の行動にどのような変化を生じさせるかについて考察する。

パレオアジア文化史学において、これまでに引き出されてきた現生人類の拡散に関わる重要なモデルが、通称「二重波モデル」とよばれる生態文化的分布拡大モデルである。これは、新人と旧人の2つの人類集団が想定された場合、その集団には「スキル」を持つ個体と持たない個体が存在し、「スキル」を持つ個体が増えることによって環境収容力が増加し、それが、新人集団において生じたことによって、新人が旧人を同化あるいは駆逐するモデルが基本とされてきた。一方で、このモデルは、ルヴァロワ石器と小石刃という石器の生産方法の技法を「スキル」とし、それぞれの石器の出現頻度の現象を説明するものであることには留意しておく必要がある。すなわち、この生態文化的モデルにおける生態とは石器の生産であり、文化とは石器の製作技法であり、それらをあわせて説明するモデルであるということである。一方で、考古学的な知見からは小石刃の出現頻度と低ランク資源とよばれる比較的、小型の動物の遺存体との相関も示唆されている。個体や集団を維持するための生態資源の獲得と生態資源を獲得するための技術や道具との関係は、パレオアジア文化史における重要な議論の核となる。

文化人類学的なアプローチからは、生態資源獲得の技術の変化が実際に獲得される生態資源の内容や量にどのような影響を与えるかについては一定の考察を与えることが期待される。本稿では、こうした観点から、生態資源を獲得するための新たな技術の導入により、(1)生態資源は変化するか否か、(2)新たな技術は定着するか否か、(3)従来の技術は維持されるか排除されるか、について考察を進める。具体的には、ガレラ族が漁撈活動で使用している漁船に導入されている船外動力に注目し、(1)生態資源の指標として漁撈活動の領域、(2)新たな技

術の指標として船外動力機の有無、(3)従来の技術の指標として漁船の形態との関係について調査した結果を示しながら、新たな生業獲得の技術が集団に導入、定着する条件について考察する。

### 調査地と調査対象の概要

調査地であるハルマヘラ島は、北マルク州に属する面積約18,000平方キロメートルの島である。熱帯気候に属し、年間の降水量は約2000mm、平均気温は26.9℃(World Climate, <http://www.worldclimate.com>)と、年間を通じて高温多湿な自然環境である。東南アジア島嶼部とパプア・ニューギニアからオーストラリアの中間にある同島は生物学的にはユニークな特徴を有しており、ウォーレス線の東側にあることから基本的な動物相はオーストラリア区に属しているが、ウェーバー線の東側にあることからスラウェシとは異なる動物相をもつ。文化的にも独特なものがあり、言語については、北部ではニューギニア側と関連をもつと考えられる非オーストロネシア系の言語が話されているのに対し、南部はオーストロネシア系の言語集団が存在している。現在では形骸化しつつも、慣習的に行われてきた生業活動についても、サゴヤシ澱粉の採集、根栽を中心とした焼畑農業が行われている一方で、東南アジア島嶼部と共通する陸稲や雑穀の焼畑も行われてきた。このように、東南アジアとオセアニア地域との交接する部分であることから人類学的な関心を集めた時期もあり、特に国立民族学博物館による、日常生活や信仰、生業や生態資源利用に関する民族誌調査が1976年に実施された(石毛1977; Ishige ed. 1980)。この時の調査の記録は現在、国立民族学博物館に保管され、アーカイブス化が進められている。

今回の調査は、1976年に調査が集中的に実施された北部のガレラ族の集落であるリマウ(Limau)で実施した。ガレラ族は、ハルマヘラ島北部・ガレラ(Galela地区)の一集団である。リマウは州都であるソフィフィから自動車で6時間ほど離れた人口749名(2018年)の海岸沿

いに立地した集落である。国立民族学博物館の1976年の調査時には人口は241名であり、集落の規模は拡大している。集落の成員は日常的にはインドネシア語を用いているが、ガレラ語も併用している。イスラム教徒が7割でキリスト教徒が3割であり、この比率は1976年時からほとんど変わっていない。集落内にモスクと教会が1棟ずつ建立されており、それぞれの信者がモスクと教会を中心に暮らしている。

基本的な生業は農耕と漁撈であり、農耕活動では、主食となるバナナ、マニオク、サツマイモを栽培し、商品作物としては、コブラ、ナツメグの栽培に従事している。漁撈活動では、サンゴ礁の礁池や沿岸における釣り漁を中心に行なっており、一部の住人による狩猟活動も継続されていた。

### 漁撈活動と漁場

リマウにおける漁撈活動は、1976年の調査から大胡修が詳細な報告を行なっている。当時の漁法には釣り漁（手釣り、竿釣り、延縄）、網漁（又手網、浮刺網）、突刺し網、建干簀漁、釜漁が報告されている（大胡 1979: 489）。筆者の調査時に確認できたのは、釣り漁は①漁船を使った手釣り、②ポリタンクを用いた浮玉釣り、③浮刺網漁、④水中銃を用いた潜水漁、⑤生簀漁である。

これらの漁撈活動は漁場によって使い分けられており、比較的海岸に近い場所(a)では③浮刺網漁 (Fig. 1) が、礁池(b)では①漁船を使った手釣りや④水中銃を用いた潜水漁 (Fig. 2)、沿海(c)では①漁船を使った手釣り、②ポリタンクを用いた浮玉釣り (Fig. 3)、④水中銃を用いた潜水漁、河川がはいりこんだ入江地になった部分では水中銃を使った⑤の漁法 (Fig. 4) が採用されていた。



Fig. 1 海岸近くで行われる浮刺網漁。子どもたちが魚を追い込む役割を担う。



Fig. 2 潜水漁に向かう男性。水中銃は銃身が長いものと短いものがあり、漁場や時間によって使い分ける。



Fig. 3 沿海で浮き玉釣り漁の漁果。浮きにはポリタンクが用いられていた。



Fig. 4 河川の河口付近の住人が家屋近くに水を引き込み行う生簀漁。水中銃が用いられる。

### 漁船の形態

リマウで用いられていた漁船は、比較的大型で船外機を装着したもの（TypeA -16 隻）と、小型で船外機を装着していないもの（TypeB -26 隻）とを確認することができた。すべての漁船は浮木が船体の両舷に装着された、いわゆるダブル・アウトリガー付きのカヌーである。これは、ハルマヘラ、ボルネオ、スラウェシ、セラムの各島よりも南部の地域に特徴的に見られる形式であるとされている（Haddon & Hornel 1938: 22）。

1976 年の調査では船外機を装着した船が 33 隻中 1 隻であり、これは漁撈にはほとんど使用されず、もっぱら集落外への移動のために用いられていた（大胡 1979: 517）。このことから、現在のリマウで使用されている漁船の船外機は漁撈活動のための新たな技術の導入がはかられたものと考えてよいであろう。

比較的大型で船外機を装着した漁船は現地では、perahu ketinting (Fig. 5)、小型で船外機を装着していない漁船は、perahu dayung (Fig. 6) と、それぞれインドネシア語での呼称でよばれていた。調査ではそれぞれのタイプの漁船の 1 隻の実測と、海岸で確認できた漁船すべての全長の測定を行った。それに、1976 年に記録された船の全長のデータを加えたものが、Fig. 7 である。



Fig. 5 船外機付きの船。TypeA に相当。



Fig. 6 従来のタイプのカヌー。TypeB に相当。

1976 年の調査で記録された漁船の名称は、*awa*、*bolotu*、*pakata*、*pelang* という名前が与えられていた。当時、使用されていたのは、*awa* が 23 隻、*bolotu* が 6 隻、*pakata* が 3 隻、*pelang* が 1 隻である。それぞれの特徴の概要は、*awa* と *bolotu* の全長がそれぞれ、4.7 m と 5.6 m と比較的小型であり、1 人から多いもので 4 人まで乗れる漁船であった。もっぱら漁撈に使われており、手釣り漁や突き刺し漁、浮き刺し網漁に用いられていた。漁船によっては帆が装着されるものもあった。一方で、*pakata* は叉手網漁にもっぱら使用され、*awa*、*bolotu* が丸木舟であるのに対し、*pakata* は組板船であり 8.5 m とその全長は長いことが特徴となっている（大胡 1979）。また、1976 年に記録されたりマウ集落のカヌーのアウトリガーの装着方法は、横木と浮木の間に助材がはさみこまれる間接装着が採用されていた。2019 年の調査では、アウトリガーの装着方法には直接装着法も観察され、その割合は、TypeA は間接装着が 1 隻、直接装着が 16 隻、TypeB では、間接装着が 23 隻、直接装着が 3 隻という結果であった。以上の結果をまとめたものが、Table 1 である。

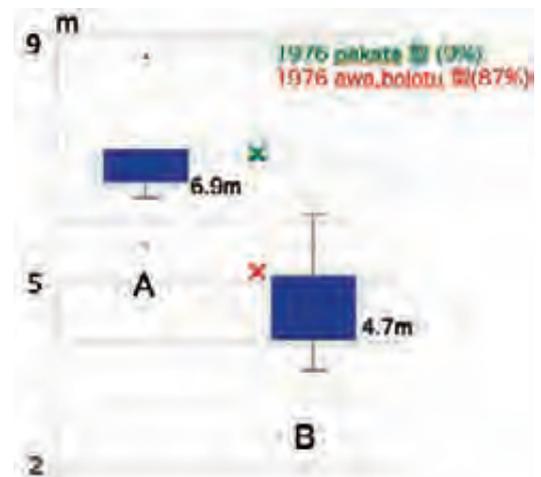


Fig. 7 船外機の有無による船の型式と全長との関係

Table 1 調査した漁船の属性データ。

名称	2019 年調査		1976 年調査(大胡 1979)		
	perahu dayung	perahu ketinting	awa	bolotu	pakata
数	26	17	23	6	3
全長 (m)	4.7 (平均)	6.9 (平均)	4.7	5.6	8.5
丸木船	26	0	23	6	0
組板船	0	17	0	0	3
間接装着	23	1	23	6	3
直接装着	3	16	0	0	0
船外動力使用	26	17	0	0	0
沿海での漁撈	○	○	○	○	○
礁海での漁撈	○	—	○	○	—

## 考察

1976年当時の漁撈技術と2019年の漁撈技術とを比較した場合、大きく異なるのが船外動力の導入である。2019年に使用されていた漁船43隻のうち17隻(約40%)が船外動力を利用しており、そのすべてが組板船で全長の平均値も船外機を装着しない船よりも大きい結果が得られている。一方で、船外動力という技術的な革新が導入されても、従来の小型の丸木船は淘汰されずに利用され続けていることには留意しておく必要があるだろう。また、1976年当時には見られなかった直接装着の形式をもつアウトリガーが船外動力をつけている漁船だけでなく、従来型とも言える小型の丸木船の漁船にも導入されている現象が見られた。横木と浮木の装着形式は船の航行に機能的な影響は与えないとされており、船外動力の有無や船のサイズに応じた機能的な適応がはかられた結果生じたとは考えにくい。以上のことをまとめると、リマウにおいて使用されてきた漁船は、礁海や沿海での漁撈活動に使用されていた *awa* や *bolotu* とよばれる集落の成員の大多数が使用していた小型の丸木船は、2019年の時点では、*perahu dayung* とよばれるほぼ同一の形態の漁船に継続されてきた。ただし、その一部には従来用いられなかったアウトリガーの直接装着が数は少ないながらも導入されていた。一方で、1976年時にはごく少数の成員によって使用されていた *pakata* とよばれる組板式の漁船は船外機の導入を受容することにより、2019年時には全体の約4割を占めるようになった。アウトリガーの装着法にも直接装着法が積極的に導入されている。

船外動力という漁撈活動における革新的な技術が導入されているにもかかわらず、従来の小型の丸木船が継続的に使用され続けている背景には、これらの地域における生態資源獲得の空間が大きくは変わっていないということが考えられる。現在の主要な漁場と漁法は、主として浮き刺し網を行う海岸近く、水深の浅い礁池における手釣り、沿海における手釣りやポリタンクを用いた浮玉釣りであり、水深の浅い礁池における手釣りでの漁獲も日常生活に必要な魚を得ることは可能である。また、礁池は水深が浅く、燃料を使って大型の動力船を利用するよりも、手漕ぎで速やかに移動できる小型の漁船がコストの面でも有利である。さらに、もともと従来型の小型漁船で沿海での漁撈も行っていたことから、生態資源の利用範囲は大きくは変わらないと考えてよい。一方で、船外動力付きの漁船は沿海への移動を楽にし、カジキマグロ等の経済的価値のある資源を獲得する機会を増やすことにはなる。

一方で、新たに導入された船外動力という技術にとも

ない、アウトリガーの直接装着法という新たな漁船製作技術が導入されていることについては、これらには漁撈を機能的に行ううえでの利点がないことから、漁船建造のうえでの技術的な利点として考えることができる。すなわち、間接装着法にくらべて直接装着法は簡便であることから、船の建造コストをさげるための生産的な技術導入と考えることも可能である。これらの現象を以下のように記号化して、その関係を形式的に考えてみる。

従来の手漕ぎ技術：T1 のもとで

- 1) 海岸部から得られる生態資源量：E1
- 2) 礁海から得られる生態資源量：E2
- 3) 沿海から得られる生態資源量：E3

とし、新たな船外動力技術：T2の導入で得られる生態資源量を効率係数  $k_1$ 、 $k_2$ 、 $k_3$  とした場合、それぞれで獲得できる資源量は、 $k_1E_1$ 、 $k_2E_2$ 、 $k_3E_3$  となる。T2 導入後の T1 と T2 の技術の採用の比を  $1-p:p$  とすれば、T1 が導入された後に期待される資源量  $H$  は、

$$H = (1-p)(E_1 + E_2 + E_3) + p(k_1E_1 + k_2E_2 + k_3E_3) \quad \text{..... (式1)}$$

と示すことができる。

$H = (E_1 + E_2 + E_3) - p\{(1-k_1)E_1 + (1-k_2)E_2 + (1-k_3)E_3\}$  と変形できることから、T2 技術を導入した場合の獲得資源量の増分  $H_2$  は、

$$H_2 = -p\{(1-k_1)E_1 + (1-k_2)E_2 + (1-k_3)E_3\} \\ = p\{(k_1-1)E_1 + (k_2-1)E_2 + (k_3-1)E_3\}$$

と示すことができる。

$0 < p < 1$  であることから、

$$(k_1-1)E_1 + (k_2-1)E_2 + (k_3-1)E_3 > 0 \quad \text{..... (式2)}$$

すなわち、

$$k_1E_1 + k_2E_2 + k_3E_3 > E_1 + E_2 + E_3$$

を満たすような、 $k_1$ 、 $k_2$ 、 $k_3$  ならびに  $E_1$ 、 $E_2$ 、 $E_3$  の関係を考える必要がある。

ここで注意すべきことは、 $E_1$ 、 $E_2$ 、 $E_3$  から得られる資源量は必ずしも同じではないということと、それぞれの資源地での獲得効率も異なるということである。ハルマヘラの事例に照らし合わせれば、技術 T1 は沿海での獲得効率は  $k_3 > 1$  が想定されるが、海岸部では  $k_1 < 1$  となることが考えられる。

ハルマヘラで実際に行われていた事例では、T2 による資源獲得は  $E_1$  では 0 であり、 $E_2$  でもほとんど行われていなかった。したがって、式 1 は、

$$H_3 = (1-p)(E_1 + E_2 + E_3) + pk_3E_3 \\ = (E_1 + E_2 + E_3) - p\{(E_1 + E_2) + (1-k_3)E_3\}$$

と示すことができる。

第1項はT1で得られる資源量であり、第2項がT2技術導入による資源の増量分である。したがって、

$$-p\{(E1+E2)+(1-k3)E3\} > 0 \dots\dots\dots (式3)$$

であれば、生態学的な適応の状態が成立していることになる。

式3から、 $E1+E2+E3 < k3E3$  となることから、ハルマヘラにおけるT2技術の導入によって得られる沿海での資源量は、従来の手漕ぎカヌーのみで獲得されていた海岸、礁海、沿海で獲得される資源量よりも大きくなければいけないことになる。これは、新たに導入された技術が、それに適した資源空間に導入された場合に適応的であることを示している。

## 結語

生態資源の獲得手段の新たな技術がある集団に導入された場合の、集団の反応は以下のようにまとめることができる。

(1) 既存の生態資源の利用には在来技術と新技術が並存

これに対応する民族誌的事実は、ハルマヘラの民族誌の場合、従来型のカヌーと船外動力機つき漁船が併用さ

れているということである。この背景には、船外動力機つきの漁船は、必ずしも従来型のカヌーを用いた漁場のすべてに適応的ではなかったが、沿海での漁撈へはより適応的であり、そこでの獲得資源量が、従来、獲得できていた資源量よりも多いということがあった。

(2) 生態学的適応と無関係の事物の在来社会への定着

これに対応する民族誌的事実は、ハルマヘラの民族誌の場合、カヌーフロート装着法の組み込みが、間接装着法から直接装着法という単純な構造へ移行する現象が見られたことである。これについては、技術の生産様式の効率化という問題があり、今後の検討の対象としたい。

## 参考文献

Haddon and Hornell

1936-1938 *Canoes of Oceania*. Bishop Museum Press.

石毛直道

1977 「国立民族学博物館ハルマヘラ調査隊概報」『国立民族学博物館研究報告』2: 423-429.

Ishige, N.

1980 *The Galela of Halmahera*. National Museum of Ethnology, Japan.

大胡修

1979 「Limau 村の漁撈活動：ハルマヘラ調査ノート」『国立民族学博物館研究報告』3: 486-519.

# ユーラシアの温帯草原における人の行動パターンとその痕跡

藤本透子

(国立民族学博物館)

## 1. 研究の背景と目的

本稿は民族考古学の議論を手掛かりとしながら、ユーラシアの温帯草原という環境下における新人の行動パターンとその痕跡の関係を、カザフスタンにおける文化人類学調査から検討することを目的としている。ユーラシア大陸北部には、東欧から中央アジア北部（カザフスタン）を経てモンゴルまで温帯草原（ステップ）が広がっている（写真1、写真2）。モンゴル及びカザフスタンで



写真1 アルタイ山脈西麓の草原



写真2 岩山の洞窟コヌル・アウリエ

は、A01 班で考古学調査が進められ、アルタイ山麓やアラタウ山麓、カラタウ山麓など複数の地点から旧石器が出土している。ユーラシアの西部から東部へと新人が拡散していった際、草原に山地が点在し草食動物が豊富なこの地域をどのように利用して暮らしており、またその行動はどのような痕跡として残り得るのだろうか。

狩猟採集民を対象に生態資源の獲得と利用を広く検討した Binford (1980) は、主として次の2種類の年間移動パターンを区別している。1) forager: 居住地を比較的頻繁に移動して食料を獲得し、食料を保存しない。2) collector: 主要な居住地のあいだを季節的に移動し、食料を保存する。この2つのパターンで、狩猟採集民の行動による各地点の痕跡に差異があるという。カザフスタンで民族考古学的調査を行った Chang (2006) は、この議論をユーラシアの温帯草原の居住・移動形態の分析に応用した。その上で、温帯草原に暮らす人々は紀元前1000年頃から家畜という食料を常に携帯する遊牧民になったという点で狩猟採集民とは異なるが、その移動パターンは全体的に collector に近いこと、ただし夏季は forager のように頻繁に居住地を移動することを指摘している。こうした民族考古学からの指摘をふまえ、居住と移動、埋葬、食事などの行動がどのような痕跡として残るのかを検討することで、温帯草原における遺物から行動を推測する手がかりとなることを目指して研究を進めている。

## 2. 季節による行動パターンの変化

ユーラシア内陸部は全体的に乾燥して寒暖の差が激しい大陸性気候で、年間降水量 270～420 ミリの地域に帯状に温帯草原が形成されている。北緯 51 度に位置するカザフスタン北部のヌルスタン（旧アスタナ）を例にとると、夏季（7月）の月平均気温は+21度、冬季（1月）の月平均気温は-14度で、30度以上の差がある。このように寒暖の差が激しく乾燥した環境下での行動パターンを、カザフスタンでの聞き取りと観察から概観すると、次のとおりである。

### 1) 居住と移動のパターン

20世紀前半に定住化するまで、季節により居住と移動のパターンには大きな差があった。夏季には北部の草原、冬季には南部の草原の岩山の陰など比較的温暖で強い風を遮ることができて水源にも近い場所が、居住地として選ばれていた。また、移動が容易な夏季には、天幕ごと比較的頻繁に移動していたのに対し、厳寒となる冬季には一ヶ所に長く滞在して固定家屋も築くなど、あまり移動しなかった（こうした冬季の居住地付近が、現在の定住村落に発展した場合が多い）。

居住や移動の単位となる集団は、父系親族関係によってつながる数家族が形成することが多かった。複数の集団の離合集散が、社会的側面から見た移動の特徴である。季節的に移動する暮らしのなかで死者は、a) その地に葬るか、b) 父系親族が葬られている地に葬るという大きく分けて2つの方法がとられたことも、居住と移動に関連して指摘しておきたい。

### 2) 食料の保存と消費パターン

温帯草原では、定住化前はもとより、定住化した現在も、草食動物の肉が重要な食料（特に蛋白源）である。食料獲得の方法は、すでに狩猟採集民ではないのでここでは検討せず、保存と消費についてのみ述べる。草食動物（家畜）は、屠ってすぐに肉を加熱調理して食べるほか、季節によって異なる保存の仕方をする。夏季は干肉にし、冬季は日中も氷点下の気温を利用して冷凍する。気温が0度を超え始める春には、肉を燻して保存する。

食料の消費は、基本的には家族単位である。しかし、しばしば家族を超えて親族や近隣の人々が集り、儀礼を行って共食する。特に夏は、移動が容易なため最も多くの人々が集まって婚姻儀礼や祖先のための儀礼を行い、盛大に共食する機会が多い。肉の共食が社会的に重要で、

頭部や寛骨は年配の男性に供するなど、分配に関わる一定の規則がある。

## 3. 行動の痕跡

文化人類学調査から概観された、季節によって変化が大きい上述の行動パターンは、痕跡としてどのように残るのか、またどのような場合に残りづらいのだろうか。居住の痕跡と、それにかかわる埋葬の痕跡、そして食事の痕跡について以下にまとめる。

### 1) 居住の痕跡

20世紀前半まで（定住化以前）の居住の痕跡は、夏季には残りづらく、冬季に残りやすい。例えば炉は、冬には調理用としても暖房用としても同じ場所の炉が繰り返し使われるが、夏には主に調理用なので使用頻度が減り、居住地の移動も多い。現在も、夏季に儀礼のため草原の一地点に集まって肉を共食する場合、炉は一時的に作られ、痕跡が残りにくい。

礎石や壁用の石も、冬の居住地に偏る。日干レンガ住居以外に、石、灌木、芝土などで小屋が造られる（写真3、4）。この小屋は、土、草、草食動物の糞を練ったもので石の間をつないで壁を作り、その上に灌木を横に並べて、川沿いから採取した芝土をかぶせ、吸湿性の高い灰を敷き詰めて屋根としたもので、少雨のため数十年間は維持される。住居が放棄されると、芝土や灌木は残りにくいですが、石が冬の居住地に痕跡として残る。

### 2) 埋葬の痕跡

居住と移動に関わる埋葬の痕跡についても、ここで述べておきたい。冬の居住地の近くには、埋葬地も形成されやすい。埋葬の目印として地上に石を置き、さらに埋



写真3 石を積み重ねて作った小屋の壁



写真4 川沿いから採取した芝土をのせた屋根

葬地を石で囲む（写真5、6、7）。近くの川などから集めた灰色や黄土色の石に加えて、約10キロ離れた山から赤褐色の石、約80キロ離れた地点の露頭から緑がかった石を採取して使う。数年前には有力者の墓に廟を設置するため、1,000キロ以上離れたカザフスタン西部から石灰岩が切り出されて運ばれた。これは石灰岩の白が清浄さを象徴する色として好まれたためである。住居と異なり、墓に使われる石は色を選んでいる。夏の居住地よりも長く一ヶ所に滞在する冬の居住地近くに、父系親族の埋葬地が形成されることが多い。



写真5 石を積み上げて作られた墓の囲い（20世紀初頭）。手前は川。



写真6 埋葬地を示すために置かれた石（1930年代）。



写真7 石を積み上げて作られた墓の囲い（1990年代に設置）。壁とドーム部分が緑がかった石。

### 3) 食事の痕跡

食事の痕跡である動物骨に関しては、滞在期間と消費の規模という2つの要因を考える必要がある（写真8）。肉を食べた後の骨の大半は、屋外に捨てられるか、炉にくべて燃やされる。一部の骨は、儀礼的な意味を込めて保存されたり、道具として再利用される（写真9、10、11）。全体的な傾向として、動物骨は長く滞在する冬の居



写真8 儀礼の際に共食するヒツジの骨付き肉。



写真9 ヒツジの頸椎（右）。産後の女性がヒツジ肉を食べた後、赤ん坊が健やかに成長し首が早く据わるよう願って頸椎を保存する習慣がある。中央から左は、容器として使うため乾かしているヒツジの胃とウシの腸。



写真10 骨製の編み針（中央）



写真 11 食べた後に髄を抜いて加工されたヒツジの骨。赤ん坊をゆりかごに寝かせたときに排泄用の管として使う。

住地に残りやすい。しかし、移動が容易な夏に、結婚や祖先のための儀礼などに多数の人々が集まって交流し共食する習慣があるため、短時間の滞在であっても頭部を含む動物骨の残存が多い場合がある。

#### 4. 温帯草原での人の行動と痕跡の特徴

ユーラシアの温帯草原における行動パターンとその痕跡について、文化人類学にもとづく調査からこれまでに分かった点は次のとおりである。

##### ①居住・移動の季節的变化

温帯草原での居住と移動には、季節による顕著な差がある。厳寒となる冬季には一地点に居住する傾向が強く、夏季には比較的頻繁に移動する。

##### ②痕跡の差異

このため、痕跡は夏季には残りづらく、冬季に長期間過ごす地点に残りやすい。居住地だけでなく埋葬地も、冬季に一地点にまとまりやすい。居住地と埋葬地で、使う石の種類には差異がある。墓用の石は象徴性を帯びており、遠方から運ばれることがある。

##### ③集団間の交流

遺物は長期間滞在する冬営地に集中するが、集団間の交流はむしろ移動が容易な夏に活発である。肉の共食が、家族を超える集団の交流に重要な役割を果たして

おり、動物骨がその痕跡として意味をもつ。

以上、本稿ではユーラシアの温帯草原（特にカザフスタン）の事例をまとめたが、その南方はさらに乾燥した地域で、オアシスが点在する（ウズベキスタンなど）。ここでは水源の有無がより重要で、より定住性が高く、オアシスごとに特徴的な集団が形成された。オアシスにおける人の行動と物の関係、製作技術、集団間の交流の特徴については、菊田報告を参照されたい。

昨年度の B01 班報告書で野林は、狩猟採集民の民族誌データの集成と標準化を気象条件と照らし合わせながら行い、現在では狩猟採集民が暮らしていない地域についても「投射」して過去を推定していく可能性を指摘している（野林 2019）。現在では狩猟採集民がいないユーラシアの温帯草原などの場合、その地域の人々の行動パターンを文化人類学調査から把握し、他地域の狩猟採集民の民族誌データを参照し、考古学データとの関連を検討していくという作業が必要になる。今後、考古学とより連携を深めつつ、文化人類学に基づく調査を継続していきたい。

\*写真の撮影地はすべてカザフスタン。

#### 参考文献

- Binford, Lewis R.  
1980 Willow Smoke and Dog's Tail: Hunter-Gatherer Settlement System and Archaeological Site Formation. *American Antiquity*, Vol.45, No.1, pp.4-20.
- Chang, Claudia  
2006 The Grass is Greener on the Other Side: A Study of Pastoral Mobility on the Eurasian Steppe of Southern Kazakhstan. In Sellet, Frédéric, Russell Greaves, and Pei-Lin Yu (eds.) *Archaeology and Ethnoarchaeology of Mobility*. Gainesville: University Press of Florida.
- 野林厚志  
2019 「民族誌データの定量分析と考古学への援用—帰納モデルと投射 (projection)」野林厚志編『パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究 B01 班 2018 年度研究報告』 pp.23-29.

# 東南アジア古層の神話・世界観と竹利用

山田 仁史

(東北大学)

## 神話のビッグデータ解析

近年、全世界に分布する神話モチーフのビッグデータ解析が進んでいる。たとえばロシアのユーリー・ベリョースキン<sup>1</sup>はヨーロッパの9言語によるテキスト、約5万話のデータベースを自力で作成し、2150ほどのモチーフを独自に設定、主成分分析法(PCA: Principal Component Analysis)などの方法を用いた成果を続々と発表している。またフランスのジュリアン・デュイ<sup>2</sup>は、一部ベリョースキンとも協働作業しつつ、世界神話の「系統解析」(phylogenetic analysis)に取り組んでいる。

その結果、東南アジアの神話について新たな知見もたらされつつある。たとえば死の起源神話の分析からベリョースキンは、「現生人類が東南アジア・東アジアに定着した後、彼らの神話における複雑性と多様性は格段に増したようだ。数百とは言わないまでも数十の新しい(アフリカには未知の)モチーフが出現し、近い過去において太平洋東岸と西岸どちらの諸民族にも共有されたのである」と述べる(Berezkin 2009: 87)。

また別の論文では、「……シベリアと東南アジアの両方に典型的な多くの神話モチーフが、アメリカにも見出される。またシベリアとアメリカ、および東南アジアとアメリカにのみ見られるモチーフもある。こうした分布は、異なるアジアの集団が別々に新大陸に入ったことを反映している」とも言う(Berezkin 2016: 225)。

さらにデュイとベリョースキンらの共著論文でも、東南アジアが一つのクラスターをなすことが示唆されている(Thuillard et al. 2018: 414)。このように、現生人類の移住・拡散にともなって運ばれた神話・宗教的世界観を考える上で、東南アジアが一つの重要な地域であることが、改めて認識されている。

## 東南アジアにおける神話・宗教の重層性

他方、考古学・遺伝学・古人類学・言語学などの成果を総合しつつ、東南アジアにおける人類集団の重層性が

指摘されている。ピーター・ベルウッド著『最初の島嶼民たち』では、古層の(5万年前にはもう東南アジアに到達していた)オーストラロ=パプアン(Australo-Papuan)と、より新しく(紀元前3500年から前1300年の間にオーストロネシア系などの言語とともに)入ってきた「アジアン」(Asian)とを区別する(Bellwood 2017: 86)。

その上で、東南アジアにかつて広く居住していたオーストラロ=パプアンの特徴を比較的よく残しているのが、ネグリートである、とする(Bellwood 2017: 94)。ネグリートとは低身長、黒っぽい肌、縮れ毛という身体的特徴をもつ人々で、アンダマン諸島、マレー半島(セマンなど)、フィリピン(アエタ、ママヌワなど)に居住している。しかしかつては東南アジア全域に居住していたとベルウッドは見ているし、各地の神話に登場する小人族はその反映かもしれない(Yamada 2007)。

こうした知見ももとに、やや図式的ではあるが、また形質と文化はそのままパラレルとはなり得ないことも重々承知しながら、東南アジアにおける神話・宗教の多層性をおおまかに示すなら、

新	仏教・イスラーム・キリスト教・道教
↑	マレー系 (“Asians”)
古	ネグリート系 (“Australo-Papuans”)

といった具合になる。

## ネグリートへの注目

このうちネグリート系の人々には、東南アジアにおける古層の住民であるとして、分子人類学者たちがかねてから注目してきた。たとえば尾本恵市はかつて、「私は、かれら[ネグリート]は、フィリピンやマレー半島、アンダマン島などに残る、スンダランド……の生き証人というべき狩猟採集民であると考えています」と述べている(尾本 1996: 123)。

そして近年、メラネシア人（パプアニューギニアとブーゲンビル島の人々）とオーストラリア人のほか、フィリピンのネグリートにもデニソワ人のゲノムが伝わっていることが明らかになった（斎藤 2017: 47-48, Jinam et al. 2017）。つまりネグリートの人々は、東南アジアにおける新人文化形成プロセスを知る上で、重要な鍵を握ることが改めて認識されつつある。

では彼らの形質だけでなく、文化面についてはどうなのだろうか？ とくに神話・宗教的な側面については、何か分かっているのだろうか？

### ネグリート神話・宗教の研究史

ここで簡単に研究史を振り返っておこう。ややバイアスもかかった理論だが、W・シュミットは『人類進化史におけるピグミー諸族の位置』（Schmidt 1910）において、低身長の特徴採集民こそが人類の古い文化状態を残している、と考えた。しかし特にアジアのネグリート系について、資料はまだ限られていた。その後1922年には英国のラドクリフ＝ブラウンが有名な『アンダマン諸島民』（Radcliffe-Brown 1922）を発表し、状況は少し改善されたが、まだまだ資料は不足していた。

先に挙げたシュミットは当時、ずばぬけた指導力を発揮している。つまり彼はフィリピンに長期滞在していた、ベルギーのカトリック淳心会（C.I.C.M.）神父ヴァンオーヴェルベルク（Morice Vanoverbergh）にアエタ調査をもちかけ、その成果を『アントロポス』誌に報告させる（1925-38年にかけて断続的に発表）。

またこれと相前後して、シュミットと同僚であったシェベスタ（Paul Schebesta）もネグリート調査に赴く。すなわち1924年にセマンのもとへ2年間、そして1938-39年にかけてアエタのもとへ6ヶ月。こうして東南アジアのネグリート系諸族にかんする資料は増加する。

しかし実は彼らよりも早く、フィリピン各地のアエタのもとで調査を続けていた男がいた。それはジョン・M・ガーヴァンで風変わりな人だったらしく、あまり確実な伝記資料は残っていないが、1875年11月19日にアイルランドで生まれ、米国に帰化して教師となった。1898年にフィリピンがアメリカ領となると、志願して同地へ渡るも、アル中になったらしく、森の中で商店を営むなどしながら、アエタなど現地の人々と生活をともにする。のち1924年から25年、日本や華南なども経由してアメリカへ戻り、人類学の知識を活かしてカリフォルニア大学バークレー校などにも勤める。1938-41年の間に亡くなったらしい（Hochegger 1963）。

ガーヴァンのアエタ調査記録は手稿のまま、1938年に

ジョン・M・クーパーのもとに渡る。クーパーはカトリック司祭兼人類学者で、米国ワシントンD.C.のカトリック大学（Catholic University of America）教授をつとめ、『プリミティブ・マン』（*Primitive Man: Quarterly Bulletin of the Catholic Anthropological Conference*）という学術誌を創刊した人物でもある（1953年、*Anthropological Quarterly*と改称）。

この雑誌にクーパーは、ガーヴァン手稿にも依拠しつつ、「アンダマン・セマン・アエタの文化関係」（Cooper 1940）という重要な論文を出した。これは、それまで知られていた東南アジアのネグリートにおける文化要素がどれだけ重複・共通しているかを吟味したものだ。R・ローウィーがクーパーの追悼文において、この論文は「アジアのネグリートが原初的には一体だったことを強力に論証している。健全な判断力と資料の精査が組み合わさると、何が達成できるかという最もよい事例」と激賞した力作である（Herzfeld 1991）。

その後になるとシェベスタ自身もアジア・ネグリエートの宗教を比較しているし（Schebesta 1957: 308-311）、ヘーファーも同様の試みをしているが（Höfer 1975）、いずれもクーパーの先駆的研究を基礎としており、その価値は変わっていない。

### ネグリート神話・宗教における共通要素

クーパーはこの論文で、三つのネグリート群のうち、二群以上に共通する文化要素を55項目あげた。そのうち9項目は三群すべてに共通している。そしてセマンとアンダマンに共通するのは11項目と少ないのに対し、アエタとセマンに共通するのは23項目、アエタとアンダマンに共通するのは20項目という結果である。つまりアエタは両者をつなぐリンクになっていることが示唆された。いずれにしても、この三群は遠い過去からの共通の呪術・宗教的文化を保持している、とクーパーは結論している。

その中でも興味深いのは、雷やセミが重要な役割を果たすことである。たとえば雷は天上での石転がしの音、または天神の声とされる。これはマヌア・アエタ（Mamánua Eta, ミンダナオ島スリガオ州Surigao Province）、セマン、アンダマンに共通し、雷は至高神などの「偉い者」（superior being）により引き起こされる、という。つまりセマン、アンダマン、プレ＝テメル（Ple-Temer）、セマイ・サカイにおいて、雷は彼（または彼女）の声とされ、サンバレス州（Zambales）中西部のアエタでは至高存在カダイ（Kadai）の声と、また北カマリネス州（Camarines）のアエタでは、至高存在たるカヤイ（Kayai）の声と称していた。

また嵐（または他の災厄）が引き起こされるのは、多数にのぼるタブー行為によってである、ともされていた。つまりアンダマンでは、日没後から日の出まで、つまりセミが鳴いている時は静粛を守り、うるさい仕事をしてはならなかった。でないとセミとプルガの気分を害し、嵐が来る、という。セミが「歌う (sings)」のは薄明から日の出の間と、日没から夜の暗い時の間とである、と言われていた。セマイ・サカイでも同様に、朝夕セミが鳴いている時は静粛にしなければならない、と言われていた。他方でアエタにおいては、セミと嵐について詳細は記録されていない。しかし多くのアエタ・グループについてガーヴァンが記すところでは、日没時に叫んだり騒音を立てたりしてはならない。プラサ (Plaza) の報告によるとブラカン州 (Bulacan) 東部のバルガ (Baluga) アエタでは、日の出前と日の入り後に叫んだり、騒がしい仕事をしてはならない、とされていた。ここでいう「日の出前と日の入り後」を、シェベスタはセミの鳴く時間帯と解釈している。

スズメバチは雷神の使い、という観念もある。ママヌワ (Mamánua, ミンダナオ島スリガオ州) では、特定の大型スズメバチは雷神の使いなので、これに害を与えてはいけなくとされていた。またジャハイ・セマン (Djahai Semang) では、特定種の黒スズメバチ (blackwasp) を殺してはいけないというが、その理由はこれが雷神の伴侶ないし従者 (companion or attendant) だから、というものだった。

セミは高神ないし至高存在の子、という観念も興味深く、これはセマン、セマイ、サカイ、北アンダマン群すべてに共通している。ただしこの一致に最初に気づいたのはシュミットである (Schmidt 1935: 565)。セミが鳴いている時に邪魔していけないというタブーは、これにもとづくのだろう、というのがクーパーの推論だ。

なお妊娠・出産についての観念にも、興味深いものがある。たとえばアエタ (ミンダナオ島コルディエラ東部) では、生後数カ月以内に亡くなった乳児の靈魂は、野生ハトの一種の体内に宿り、そこから妊婦の中に入るといふ。この野生ハトの呼び声を聞くと、夫婦は供え物をする。この鳥を殺してはいけないが、時には罾で捕らえ、キャンプ近くの籠で飼うこともある。このハトにはそこで餌を与え、子供の靈魂に母親の中に入よう呼びかける、という。いっぽうセマンにおける靈魂鳥—スティーヴンズ (Stevens) によればレンジャクバト (crested dove) の一種、チェカ・セマン (Cheka Semang) によれば緑色の鳥おそらくハチクイ (bee-eater) の一種—は体内に、未生児の靈魂をもつとされる。靈魂は靈魂樹の上で育ち、そこから靈魂鳥に取って行かれる。妊婦は同種の木を自

分の誕生木 (birth-tree) として、これを訪れる。靈魂鳥が木にとまっているのを見つけたら殺し、妊婦がこれを食べると、子供の靈魂は彼女の体内に入る。似た観念はアンダマン北部群にもある。ここでは赤ん坊の未生魂 (unborn souls of babies) と、緑色のハトと、クワ科の木 (Ficus laccifera) との間には何らかの関連がある—後二者は同名称である。未生児の靈魂はこの木に住み、緑色のハトが呼ぶと母の体内に入るのである、という。これらは、オーストラリア・アボリジナルのいわゆる「靈魂児」(spirit children) とも似ているが、その比較は今後の課題としたい。

興味をひくタブーや観念・儀礼は他にもある。たとえば夜の口笛を忌むというもの。サンバレス州のアエタでは月が昇る時に口笛をふいてはならないと言ひ、アンダマンでは日没から日の出までは口笛をふいてならなかった。

獲物の解体についても、一定の決まりがあった。つまりアエタでは集団ごとに獲物の解体の仕方が決まっており、別のやり方をするとその後の運が悪くなる、と一般に信じられていた。また北カマリネス州のアエタでは至高存在たるカヤイが、獲物を特定の仕方解体するよう求めている、と信じられていたし、アンダマンではブタの解体の仕方が悪いと、ジャングルの精霊またはプルガが怒る、と言われていたのである。

### 雷神に血を捧げる「供犠」

さらに共通して見られたのは、雷または嵐の際に自らの身体に傷をつけて血を流し、これを捧げるという行為である。これをシュミットらは「供犠」と呼んでいる。

たとえばアエタ (恐らくミンダナオ島の多くの集団) では雷雨時に指を刺し、雷鳴の方へ向けて血をまく慣習があった。至高存在たるバヤは雷の所有主であり、雷鳴は何らかの違犯に彼が怒っているしるしであるからだ。またミンダナオ島東部のアエタ数群では、嵐は天の邪霊 (死霊?) のせいだと言っていた。それで嵐の時、人によっては体の一部に小さい切り傷をつけ、指で血を天へ散らし、精霊に「さあお前の血だ、飲め」といった何らかの呼びかけをする慣習があった。

またブラカン州 (Bulacan) 東部のバルガ・アエタでも、雷神カダイが姦通か何かの悪事に怒り、雷が鳴ると、脚に切り傷をつけて血を採り、水と混ぜて雷の方向へ投げつける一方、少量の血はカダイの妻へと、地中にやった。ふつう血を捧げるのは女性だが、嵐がひどくなる場合には男もこれをした。

このように、アエタの「宥和的出血供犠」(expiatory

blood-offering) は全体として、またほぼ細部に至るまで、有名なセマンとサカイの血の供犠に対応しているので、発生上の結びつきがあることは疑えない、とクーパーは述べる。

面白いことにこの際には竹が用いられることがあった。つまりシェベスタによれば、セマンの場合には嵐が来ると、脚のすねの部分に竹または材質不明のナイフで切り傷をつけ、血を流してこれを水の入った竹筒で受け、血と水を混ぜる。こうして混ぜたものを天に向かってまき散らし、嵐をしずめようとしたのである【図1】(Schebesta 1957: 79)。



図1 竹で脚に傷をつけ血を捧げるジャハイの女性たち (Schebesta 1957 図版より)

なおアフリカの「ネグリート」(ガボン地域) が「人の血を捧げる」ことについては、トリーユ神父が触れている (Trilles 1932: 81, 500)。さらにはボルネオ島の狩猟採集民プナンのもとでも、雷神に血を捧げることが行われてきた (Needham 1964, cf. Höfer 1975: 17)。つまり、雷雨に際して血を捧げる習俗は、ことによると古層の狩猟採集文化まで溯る可能性もある。あわせて今後の課題としたい。

## 竹という素材

そもそもチューリッヒ工科大学 (ETH Zürich) に勤めた植物学者カール・シュレーター(1885年)の古典的著作『有用植物としての竹の意義』(1885年)が言うとおり、「人間にとって益となる特徴をこれほど大量に備えた植物はあまり例がない。竹は、恵みを宿命づけられた有用物だ」(Schröter 1885: 22)。

東南アジアでは、環境の中に竹が自生する。ベルウッドが挙げる6万7000年前のルソン島カラオ洞窟の例では、石器を使わずおそらく竹ナイフによって、シカやブタを屠殺していたらしい (Bellwood 2017: 140)。

これ以外では私自身の研究した首狩の例でも、竹ナイフを使うものがあった。南米ブラジルのムンドウルク、旧蘭領ニューギニア・マリンドアニムやアスマットからも報告があるが、トレス海峡の事例が豊富である (山田 2015: 74-75, 78, 80, 97, 116)。とりわけ19世紀末、トレス海峡調査団とともにハドソンが収集・記述した竹ナイフは、

ロンドンのホーニマン博物館に複数所蔵されている【図2】。それによると、頑丈な竹から作られたこれらのナイフは長さ37-40センチくらい、柄の部分は14センチくらいだった。敵に矢を射当てたあと、その場でこのナイフの刃の部分に石英か貝により刻み目をつけ、そこから新たに鋭利な刃をはがして作り、断首に用いた。そしてこの刃は一度しか使えないので、刻み目の数は取った人頭の数を示していた。ただし、このナイフは時にジュゴンなどにも利用することがあったという【図3】(Haddon 1912: 199-200, cf. Hortolà 2017: 214)。



図2 ホーニマン博物館所蔵の竹ナイフ (同館ウェブサイトより)

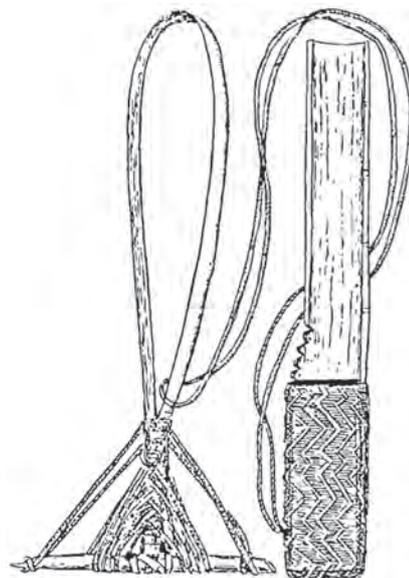


図3 ハドソンの記述した竹ナイフと首級運搬具 (Haddon 1912: 199より)

## 竹生神話

こうした竹の利用を物語るかのように、東南アジアからは竹から人間が発生したという神話も広く知られる。ネグリート系のセマンにもあるし、台湾原住民のプユマやヤミもそうした神話をもっている。またさらに広く、竹以外の植物から人間が発生するという事例も含めるなら、それらは採集生活を基礎とする中から生まれた、「植物的心性」(Vegetalismus, vegetabilische Mentalität)と呼んでもよいのかもしれない(大林 1961: 35-37, Höfer 1975: 33)。こうした世界観のあり方は、東南アジア古層の道具製作・利用のあり方を考える上でも示唆に富む、と言えよう。

## まとめ

本報告の内容を暫定的にまとめておく。まず東南アジアの神話・宗教的世界観は、さまざまな時代、異なる担い手を背景とする多層的な要素を含む。そのうちデニソワ人のゲノムを一部継承したとされるネグリート系三集団に共通するのは、雷やセミに注目するような世界観であり、〈動物の主〉のようなメガフォーナはあまり登場しない。そして有用植物とくに竹の利用という伝統の存在が、人類起源神話にも竹などの植物がよく見られること背景にあるのではないかと考えられる。この問題を比較の見地からさらに追究することが、今後の課題である。

## 参考文献

Bellwood, Peter.  
2017 *First Islanders: Prehistory and Human Migration in Island Southeast Asia*. Hoboken: John Wiley & Sons.

Berezkin, Yuri E.  
2009 Why Are People Mortal?: World Mythology and the "Out-of-Africa" Scenario. In: Peregrine, Peter N., Ilia Peiros & Marcus Feldman (eds.), *Ancient Human Migrations: A Multidisciplinary Approach*. (Foundations of Archaeological Inquiry): 74-94. Salt Lake City: The University of Utah Press.

2016 Stratigraphy of Cultural Interaction in Eurasia based on Computing of Folklore Motifs. *Trames*, 20(3): 217-227.

Cooper, John Montgomery.  
1940 Andamanese-Semang-Eta Cultural Relations. *Primitive Man: Quarterly Bulletin of the Catholic Anthropological Conference*, 13(2): 29-47.

Garvan, John M.  
1963 *The Negritos of the Philippines*. Edited by Hermann Hochegger. (Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik; Bd.14). Horn: Verlag Ferdinand

Berger.  
Haddon, Alfred Cort.  
1912 Weapons and Objects employed in Warfare. In: Haddon, Alfred Cort (ed.), *Arts and Crafts*. (Reports of the Cambridge Anthropological Expedition to Torres Straits; Vol.4): 172-204. Cambridge: Cambridge University Press.

Herzfeld, Regina F.  
1991 Cooper, John Montgomery. In: Winters, Christopher (ed.), *International Dictionary of Anthropologists*. (Garland Reference Library of the Social Sciences; Vol.638): 125-126. New York: Garland Publishing.

Hochegger, Hermann.  
1963 Introduction. In: Garvan, John M., *The Negritos of the Philippines*. Edited by Hermann Hochegger. (Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik; Bd.14): 1-5. Horn: Verlag Ferdinand Berger.

Höfer, András.  
1975 Die Religionen der asiatischen Negrito und der Stammesgruppen Hinterindiens. In: Höfer, András, Gernot Prunner, Erika Kaneko, Louis Bezacier & Manuel Sarkisyanz, *Die Religionen Südostasiens*. (Die Religionen der Menschheit; Bd.23): 1-129. Stuttgart: W. Kohlhammer.

Hortolà, Policarp.  
2017 From antiquities to memorabilia: a standardised terminology for ancestral artefacts according to manufacture date. *Studia Antiqua et Archaeologica*, 23 (2): 213-225.

Jinam, Timothy A., Maude E. Phipps, Farhang Aghakhanian, Partha P. Majumder, Francisco Datar, Mark Stoneking, Hiromi Sawai, Nao Nishida, Katsushi Tokunaga, Shoji Kawamura, Keiichi Omoto & Naruya Saitou.  
2017 Discerning the Origins of the Negritos, First Sunda-land People: Deep Divergence and Archaic Admixture. *Genome Biology and Evolution*, 9(8): 2013-2022.

Needham, Rodney.  
1964 Blood, Thunder and Mockery of Animals. *Sociologus*, 14(2): 136-149.

大林太良  
1961 『日本神話の起源』(角川新書:151) 東京:角川書店.

尾本恵市  
1996 『分子人類学と日本人の起源』(ポピュラー・サイエンス) 東京:裳華房.

Radcliffe-Brown, Alfred Reginald.  
1922 *The Andaman Islanders*. Cambridge: Cambridge University Press.

斎藤成也  
2017 『核DNA解析でたどる日本人の源流』 東京:河出書房新社.

Schebesta, Paul.  
1957 *Religion und Mythologie*. (Die Negrito Asiens, 2. Bd.: Ethnographie der Negrito, 2. Halbband — Studia Instituti Anthropos; Vol.13). Wien-Mödling: St.-Gabriel-Verlag.

- 
- Schmidt, Wilhelm.  
1910 *Die Stellung der Pygmäenvölker in der Entwicklungsgeschichte des Menschen*. (Studien und Forschungen zur Menschen- und Völkerkunde; 6-7). Stuttgart: Verlag von Strecker & Schröder.
- 1935 *Endsynthese der Religionen der Urvölker Amerikas, Asiens, Australiens, Afrikas*. (Der Ursprung der Gottesidee; Bd.6). Münster: Aschendorffsche Verlagsbuchhandlung.
- Schröter, Carl.  
1885 *Der Bambus und seine Bedeutung als Nutzpflanze*. Bale: H. Georg.
- Thuillard, Marc, Jean-Loïc Le Quellec, Julien d'Huy & Yuri Berezkin.  
2018 A Large-Scale Study of World Myths. *Trames*, 22 (4): 407-424.
- Trilles, Henri.  
1932 *Les Pygmées de la forêt équatoriale*. Paris: Librairie Bloud & Gay.
- Yamada, Hitoshi.  
2007 Mythical Little People of Taiwan: Do They Imply the Existence of Negritos? *Cosmos: The Journal of the Traditional Cosmology Society*, 23: 111-122.
- 山田仁史  
2015 『首狩の宗教民族学』東京：筑摩書房.

# ブリコラージュされたモンスターたち

山中 由里子

(国立民族学博物館)

本プロジェクトの枠組みにおいて報告者はこれまで、「驚異」と「怪異」をキーワードに、様々な文化圏の異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを、人類の「心の進化」という長いタイムスパンの文脈で捉え直す研究を進めてきた。人は自然界の直観的理解から逸脱する「曖昧で不整合な現象」に対して、「驚き」や「怪しみ」を感じ、その混乱した心理状態をなんとか解消するために、理解不能な現象の原因に霊、神／カミ、天などの、非物質的で、超越的な存在を想定する精神メカニズムを備えた (Boyer 1994)。そしてその見えない力を、なんとか都合の良いようにコントロールするために、その得体の知れないものに名前を付け、可視化し、因果性を説明しようとしてきた。しかし、人間は、直接には感知できないそうした存在の姿を想像する際には、既知のイメージの部品を使いまわし、組み合わせるしか可視化することはできない。その表象のプロセスには、レヴィ＝ストロースの言うところの「ブリコラージュ」(寄せ集め)の思考が見て取れる。

本年度は、驚異や怪異の対象となる事象に人類共通の類似性がないか、さらに、それらが想像され視覚化される際のブリコラージュの仕方に、ある程度共通したパターンがあるのではないかという問題について、世界各地の人々の想像の中に息づく生きものの表象を特別展示「驚異と怪異—想像界の生きものたち」(2019年8月29日～11月26日開催)にまとめることを通して考察した。

本特別展示では、地球上の動物界・植物界・鉱物界に見出された要素をブリコラージュした多様な合成生物を象った民族資料を、主に国立民族学博物館所蔵の標本資料から選定した。そしてこの展示を機に並んだ資料からさらにいくつかサンプルを抽出し、東北大学学際科学フロンティア研究所の田村光平 (B02 班) の協力を得て、「合成獣イメージの構成要素コード化に関する試験的研究」を行った。

報告者は、当プロジェクトの2016年度の活動報告において、「世界各地に見られる特定のモチーフ (例えば人魚

といった半人半獣)の類似性、あるいは『伝承力』(ボワイエの言葉を使えば『反復性』)も、直観と反直観、自然と超自然の結合性、バランスという観点から説明できるかもしれない」と書いたが、この「バランス」の具合を数値化して、合成獣イメージの形成パターンを見いだせないか、という試験的解析であった。

田村氏とのこの共同研究では、国立民族学博物館所蔵の世界の諸民族による造形物のうち、「合成獣」的なものの、すなわち自然界の動植物をベースにしながら、生物学的にはあり得ない部位の組み合わせで形成された霊獣、精霊、幻獣などの表象からいくつかのサンプルを抽出し、以下のようなパラメータに分解し、その組み合わせの頻度、複雑性などを分析した。

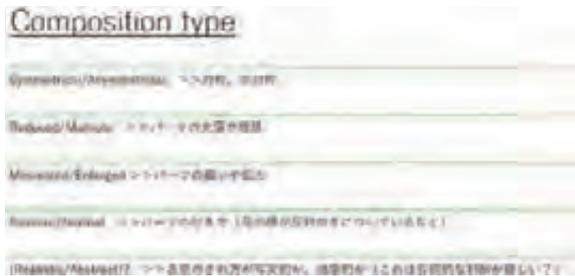
## 1) 体の部位とそれが付いている場所

Body part & position
Head
Horns
Arms (wings, fins)
Legs
Body
Skin
Tail

## 2) 生物の種類

Creature type
Mammal
Bird (non-avian)
Bird (avian)
Reptile (excluding snakes)
Amphibian
Fish (excluding aquatic mammals)
Insect
Plant
Mineral

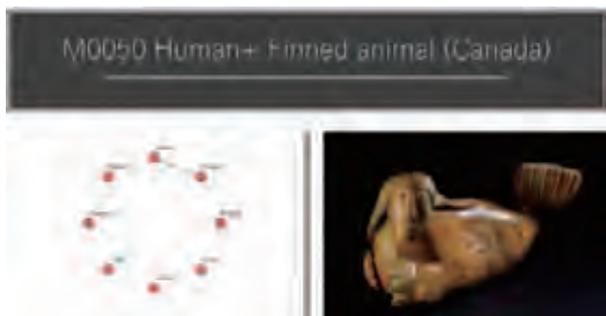
### 3) 組成のパターン



例えば、具体的な資料のサンプルで見ると、それぞれの資料における異なる種類の生物の合成を図式化すると以下ようになる。(体全体の構成が分からない仮面などは、今回の分析からは外し、彫像、絵画を中心にサンプルを選定した。)



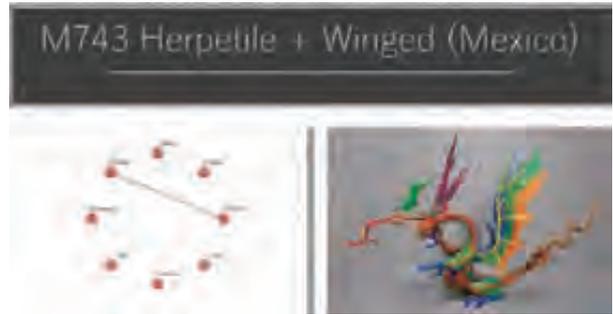
人+鳥 (マレーシア、マームリ)



人+ヒレ動物 (カナダ、イヌイット)

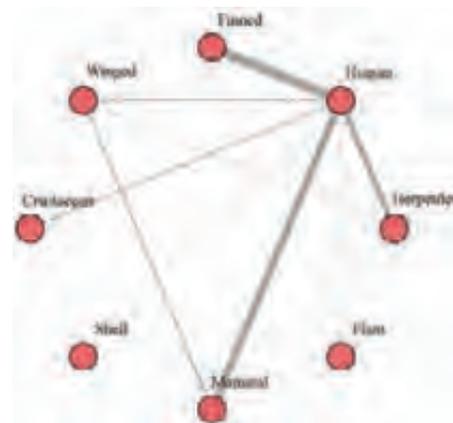


人+馬+鳥 (セネガル)



爬虫類+鳥 (メキシコ)

さらに、サンプルセット全体 (120 事例ほど) を統合すると、以下のような図式になる。(組み合わせの事例の数が多いほど線が太い。)



分析はまだ初期的な段階ではあるが、まずはここから見えてくるのは、人間が想像する合成生物の表象の多くが、「人間中心」(anthropocentric) である、という傾向である。自明の事のようにありながら、あらためてそのパターンを可視化できたことは、共同研究の成果であるといえよう。

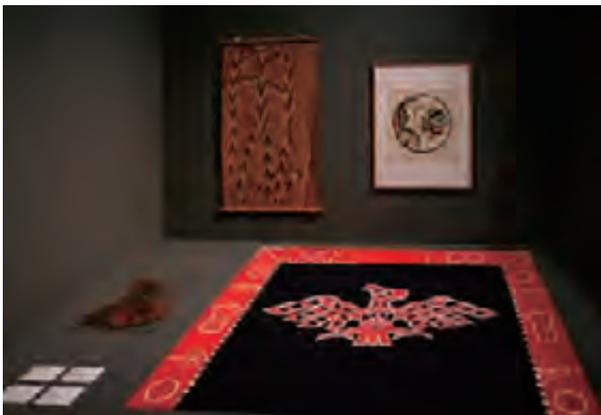
さらには、鳥の翼と昆虫の羽のように形態と機能が似ている「相似器官」や、人の腕と鳥の翼のように形態と機能は違っても進化上の起源が同じである「相同器官」が入れ替わる事例が多いことも、これらの合成獣の構成分析から見えてきた。言い換えればこれは、ロコモーション、すなわちその生物の移動手段の器官が入れ替わったり、継ぎ足されたりしているということであり、これらの合成獣の多くは、水・天・地といった「生態圏」の境界を流動的に往來することができるリミナルなクリーチャーたちである。超常的な力を目に見える形に描く際に、境界性の高い生きものとして表象するという行為は、様々な文化圏の事例に共通して言えることであり、また、32000 年前の「ライオンマン」の彫像から、人類の想像的・創造的行為はさほど大きくは変化していないのでは

ないかということも言える。

人間が想像する生きものたちの像が「どのように」構成されているか、ということについては、上記のような分析を通して傾向を見ることができ、**「なぜ」**そのようなものを生み出すのかという問いについては、数理的な分析を通して答えを出すことはなかなか難しい。

この点については、特別展に展示した様々な資料を俯瞰し、驚異や怪異の対象となってきたものの正体をいくつかのカテゴリーに分類にすることによって、人はなぜモンスターを想像するのか、という謎に迫る鍵を得ることができた。この展示にまとめることによって見えてきたのは、人間は、甚大な被害を及ぼす自然現象、抑制のきかない行動を起こす人間自身の感情、体の中の見えない病、遠くにいて見えない異質なものと、自らに危険や障害を及ぼすものを、何とか手なずけ、コントロールするために、異形の表象を生み出してきたのではないかと、ということである。

• 甚大な被害を及ぼす自然現象（天変地異など）



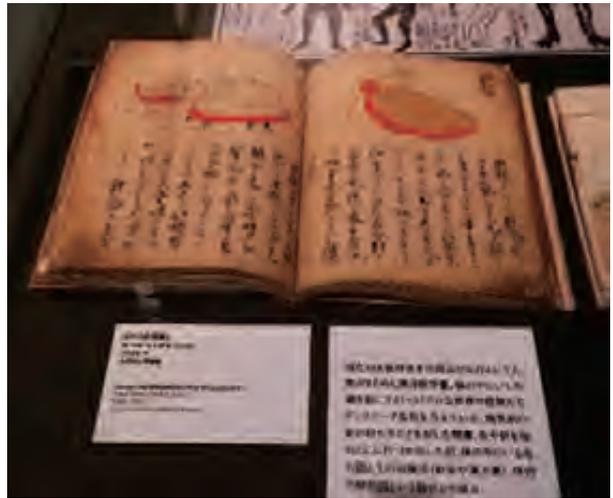
雷神、サンダーバード、イナズマヘビなど

• 抑制のきかない行動を起こすもの（狂気、欲望など）



能面（真蛇）（伝）赤鶴吉成 1289年頃  
嫉妬のあまり、角の生えた蛇と化した女性を表す

• 体の中の見えないもの（病など）



元行『針聞書』九州国立博物館蔵  
体の中において不調を起こす怪物たちを描いた江戸期の医学書

• 遠くにいて見えないもの（異民族、珍獣など）



ウリッセ・アルドロヴァンディ『怪物誌』（1642）の人魚

12月に国立民族学博物館で開かれたパレオアジアの大会において、内堀先生から環境ハザードについてのコメントがあがっていたが、先史時代の人類にとっての環境ハザード（気候変動、疫病、天災、動物）と想像的行為の間に、関連性を見いだせるのではないかと考えるに至った。

この特別展示には3か月で78682人の来館者があり、メディアでも広く採りあげられ、本研究の社会的波及効果も認められた。図録（山中編 2019）は、全国カタログ展において経済産業省商務情報政策局長賞を、タイポグラフィ年鑑2020のエディトリアル部門において審査員賞を受賞した。

本年度は、展示としての研究成果の公開に加え、B01班公募研究代表者山田仁史氏（東北大学）との共編で、

『この世のキワー<自然>の内と外』(勉誠出版)を出版した。本書では、自然界のどのような現象が「驚異」や「怪異」という超常的なものとして認識され、どのような言説や視覚表象物として表れたのか、背景にどのような自然観があるのか、なぜ特定の事象が広く、永く伝承され続けるのかといった点に注目し、西洋近代的な nature としての「自然」という概念そのものを、学際的・多元的視点から捉えなおした。

この共編著への寄稿者を中心に、人文機構シンポジウムおよび国際ワークショップ「この世のキワー自然と超自然のはざま」を11月23日(於梅田ナレッジキャピタル・カンファレンスルーム)と24日(於国立民族学博物館)に開催した(ワークショップを本科研費にて主催)。シンポジウムのキーノート・スピーカーおよびワークショップのコメンテーターとして大英博物館の英国・ヨーロッパ先史副キーパーのジル・クック氏を招へいした。クック氏は、大英博物館において特別展“Living with Gods”(神々と生きる、2017年)、“Ice Age Art: Arrival of the Modern Mind”(氷河期アート: 新人的精神の芽生え)2013などのキュレーションを担当したヨーロッパ先史時代、氷河期の芸術の専門家である。基調講演

“Monsters in mind. Unearthly images from the distant past”(心の中の怪物一象られた太古の恐怖)では、人類の認知機能の進化と、自然環境と混成動物の表象の機能の関係性を示し、モンスター的な想像上の動物の表象は恐怖の視覚化であり、人類にとって一つの防御手段であったのではないかという示唆に富む説を唱えた。

ジル・クック氏のほかにも、古代ギリシア・ローマの博物学における驚異について発表したエクセター大学のリチャード・ストーンマン氏、中世ヨーロッパの世界地図における驚異について発表したユトレヒト大学のナタリア・ペトロフスカイヤ氏も招へいし、海外の研究者との学術交流も促進した。

#### 参考文献

Boyer, Pascal.

1994 *The Naturalness of Religious Ideas: Outline of a Cognitive Theory of Religion*. Los Angeles, University of California Press.

山中由里子編・国立民族学博物館監修

2019 『驚異と怪異—想像界の生きものたち』河出書房新社

山中由里子・山田仁史共編

2019 『この世のキワー<自然>の内と外』勉誠出版

# 小規模居住集団の生活様式 —— アフリカ熱帯林のバカ・ピグミーと中国雲南の ドゥーロン族（独龍族）を事例に

彭 宇 潔

(国立民族学博物館)

## 1. 本研究の目的と方法

本研究の目的は集団内の社会的規範と集団間の相互作用という二つの側面から、現代の狩猟民たちの居住形態と移動パターン及びその変化の要因を明らかにすることである。とりわけ、狩猟を伝統的におこなっている（またはおこなっていた）小規模居住集団（Kelly 2013）に着目し、アフリカとアジアの湿潤地域の民族集団を事例にして検討する。

本研究の調査対象は、カメルーン東南部のバカ・ピグミーと中国雲南北西部のドゥーロン族である。バカ・ピグミーに対して、2010年から2019年まで筆者が継続的に合計約16か月のフィールドワークを通して、参与観察及び聞き取り調査を実施した（調査地域は図1に参照する）。ドゥーロン族に対して、2017年と2019年にそれぞれ約一週間で、現地における資料収集及び現状調査を実施したほか、国立民族学博物館にて文献調査を実施した。



図1 カメルーンでの調査地域（筆者作成）

本報告は、それらの現地調査及び文献調査にもとづいて研究の結果を報告する。

## 2. 研究の結果

### 2-1. バカ・ピグミーの居住形態と移動パターンに関する研究（投稿中）

アフリカコンゴ盆地の北西部に暮らすバカ・ピグミーは、焼畑農耕民と数百年前からすでに接触がはじまった。当時バカは森での遊動生活をしていて、一方で農耕民は、森の中で畑を開墾して農耕をしながら、バカとの相互依存関係を維持してきた（Althabe 1965）。1930年代に植民地政府による森林地域への定住化政策が実施され、農耕民諸集団は道路沿いに定住するようになった。しかしバカたちは農耕民ほどすぐには定住化せず、森での遊動生活を続けた。バカが道路沿いに定住するようになったのは1990年代になってからのことである。定住化後に、バカと焼畑農耕民諸集団を含む森の住民たちは、貨幣経済の浸透やカカオ栽培ブーム、国による自然保護区の設置、伐採事業者と開発プロジェクト関係者との接触など、激しい社会的変化を経験している（服部 2010; 北西 2003）。

筆者は個人・集落・地域という三つのレベルにおいてバカたちの居住・移動と移住にかんする事例にもとづき、彼らの移動と移住にかかわる社会的要因を、受動的と能動的に分けて、集団内と集団外という二つの側面から議論した。これに対し、狩猟採集民の移動性に関する先行研究では、生態学的・経済的な視点によって生態的な要因（自然資源）が強調されてきた（例えば Kelly 2013）。文化や社会にかかわる分析は、親族システムと照らし合わせての構造的な研究が多かった（ピグミーの場合は例えば Terashima 1985）。これは、狩猟採集民の生活世界を生態的（自然資源）と文化的（社会環境）に二分化した先行研究の時代性を反映したものだと考えられる。定住化が進んだ現代の狩猟採集民は貨幣経済にも大きく影響されて、もはや文字通りの純粋な狩猟採集民ではなく

なった。彼らの生活がどれほど変化したか、彼らの移動性がどう変わったかに関する議論には、自然—文化を二分化した旧来の考え方は適用できない。その結果、定住化後のバカ社会では、集団内においては居住・移動と移住に彼ら自身の社会的規範（親族システム）が依然として機能し、主な要因となっていることがわかった。

一方で、定住民として特徴づけられた焼畑農耕民たちは、1990年代のカカオ価格の高騰によって、2000年代にかけてカカオ畑の面積を急激に拡大した。このような畑の拡大や現金獲得手段の多様化などによって、農耕民において、親族間の居住距離が広がる傾向がみられる。ンジメでは特定の親族が子どもの名づけ親になる慣習があるが、そうした親族間の関係は彼らの居住地や移動先が決められることはない。女性の結婚による移出以外、生業活動（畑や出稼ぎなど）によって居住地が決められるのがほとんどである。また、農耕民は親族間の訪問はバカほど頻繁ではないが、労働力の借用による親族間の移動がよくみられる。例えばコナンベンベの子どもたちは、通学時期には学校に近い親戚のところに、休み中は労働力が必要とされる親戚のところに行くといった移動が特徴的である。しかし、現金獲得手段がより多様になったンジメにはそうした移動が減少している傾向がみられた。したがって、農耕民諸集団の居住形態は彼らの生業形態に強く影響されていると考えられる。

農地や活動範囲が拡大された農耕民との関係や、新たな他集団との接触という集団間の相互作用は、現在のバカにみられる短期間の移動の新たな要因として現れた。バカたちが、外部者との接触を拒絶するのではなく、柔軟に受け入れてそれらを利用していることは、外部者を介した彼らの移動が能動的なものだという点からもわかる。それに、より大きな時間軸でみると、バカの生活の基盤（大きい人口レベルの移住や農耕）まで影響を与えたのはやはり外部からの強制力がもっとも大きいことが明らかである。このように、バカたちは定住化以前においては、狩猟採集するための遊動に加えて、集団内の規範による頻繁な移動もしていたのと同時に、接触している他集団との交流による移動（農耕民の居住地に行く）も存在していた。定住化後は、狩猟採集のための遊動は減ったかもしれないが（安岡 2011）、集団内での居住と移動・移住には親族システムが規範として働き続けている。また、相互作用する他集団が増加して、集団内のつながりでは届かない遠方の土地まで移動・移住する機会も増えたのである。

## 2-2. 中国雲南省独龍江流域の少数民族ドゥーロン族に対する調査

### 1) 伝統的な生活様式（宋 1980: 20-54; 鄭 2001）

ドゥーロン族（独龍族）は雲南省北西部にある貢山独龍族怒族自治県の独龍江流域に暮らす人々である。その地域に、漢人、チベット族がマジョリティで、怒族やリス族、ミャオ族などの複数の少数民族も暮らしている。独龍江北部の上流地域はチベットと接しており、標高2千メートル以上の温帯山地で、南部の下流地域はミャンマーと接していて、熱帯低地湿潤地域である。ドゥーロン族は伝統的な焼畑農業でジャガイモや里芋、トウモロコシを主要な農作物として栽培していた。また、独龍江での漁労と、牛を主要な家畜とする牧畜をする。そして、季節に応じて、山や森に入って、野生薬草と山菜の採集を定期的におこなうほか、弓矢を用いてクマ、サル、野牛、羊などを狩る集団猟もおこなっていた。

このような複合的な生業形態にもとづいて、ドゥーロン族の人々は複数の世帯で一つの「ホータン」（火塘：調



図2 現在のドゥーロン族の調理場（筆者撮影）



図3 独龍江地域の道端でよくみられる漁労禁止時期に関する宣伝看板（筆者撮影）



図4 独龍江上流地域のドゥーロン族村落とトウモロコシ畑 (筆者撮影)

理場に相当する場所)を共有することによって、獲得した資源を分かち合うといった地域共同体的な居住形態を維持してきた。そうした地域共同体的な居住は、共同の血縁関係を持つ人々から構成されている。具体的には、一つの居住集団(村を単位にする)に各世帯の世帯主になる男性たちは互いに兄弟または従兄弟関係をもつ人々である。その居住集団に新たなメンバー(新生児)が増えることによって、人口も増加するが、結婚によって女性が出たり、新しい世帯(若い夫婦及びその子どもたち)が出たりすることを通して、居住人口の数を維持されている。また、血縁関係で形成された小規模居住集団のメンバーたちは、調理場を共有するだけでなく、焼畑農耕のための土地やその農作物、狩猟採集漁労をおこなう場所もすべて共有していた。

2) 生活様式の変化 (宋 1980: 20-54; Gros 2014; 筆者の調査)

1940～50年代に、チベット族とリス族の人たちによる封げん制的支配によって、ドゥーロン族の集団内部に貧富の格差が作られ、生業生産の道具や「ホータン」の所有権をめぐるメンバー間の紛争が頻繁にあり、様々な資源を共有する地域共同体的な生活様式が徐々に崩壊した。中国の内戦が終えたあと、独龍江流域及び周辺地域が自然保護区の一部になり、野生動植物に対する狩猟採集が全面的に禁止され、漁労も毎年4月から8月までの限った時期にしかできない。そうした政府の政策という外部強制力によって、1990年代にドゥーロン族は農牧や狩猟採集漁労といった複合的な生業形態が農牧と定期的な漁労のみに完全に移行した。栽培する農作物はコメがメインになり、最近では各種のソバも栽培している。

筆者の聞き取り調査によると、近年、自然保護区の設立と野生動植物に対する狩猟採集規制によって、ドゥーロン族は野生薬草の採集ができなくなり、それに基づく

現金収入もなくなる。そこで、中国政府はドゥーロン族の人々に重要な薬草の自家栽培を推奨した。しかし、実際に栽培に成功した世帯はそれほど多くないことが聞き取り調査でわかった。一方、政府はドゥーロン族に対して、山に分散して小規模的に居住する人々を、町の中心部に移住させる政策を実施した。移住先には集団住宅街のように家屋を建てたが、知らない人々と隣同士になりたくないとか、山から離れたくないとかという理由で移住しない世帯も結構ある。

居住する場所を変えたくない現状の中で、ドゥーロン族の人々は、子どもを町の中心部の学校に送ったり、ほかの民族との交易をしたり、観光ガイドをしたり、市場で出店したりするための移動が多数見られた。なかでは、下流地域に暮らすドゥーロン族の人々は国境を越えてミャンマーの人たちと農産物や手芸品を交換する定期市での交流がよくある一方で、上流地域に暮らすドゥーロン族の人たちはチベット族との交流がより頻繁である。このように、同じ民族であっても、日常生活においては、南北間における民族内部の交流より、同地域及びその周辺の民族集団との交流が多いことが明らかである。とこ



図5 上流地域のドゥーロン族の伝統的な家屋(一番左)と倉庫(写真の中央と右側)、ソバ畑(筆者撮影)



図6 上流地域の主要な換金作物「重楼」(Paris polyphylla)の畑(調査助手Hさん撮影)



図7 独龍江下流地域のドゥーロン族移住村落（筆者撮影）



図8 独龍江下流地域のトウモロコシ畑（筆者撮影）

ろが、ドゥーロン族の人々はそういった生態的・社会的な環境に相違があったが、これまで民族誌資料には彼らに対する民族調査はそうした地域差について言及されていない。

### 3. まとめと今後の課題

本稿はカメルーンのバカ・ピグミーと中国雲南のドゥーロン族を対象に、狩猟に依存していた小規模居住集団の生活様式、とりわけ居住形態について現段階までの研究結果を報告した。この両集団は、民族誌資料によると、バカは狩猟採集民で、ドゥーロン族は焼畑農耕民として特徴づけられた。しかし、本研究を通して、両集団に共通する特徴があることを明らかにした。1) 両集団は親族関係といった集団内の社会的規範にもとづいて居住集団を形成したのである。2) 狩猟採集民あるいは焼畑農耕民と言われても、実際はいずれの集団にも複合的な生業形態である。3) 複数の他集団との接触は昔からあって、現在でもそうした集団間の相互作用によって人々が移動している。4) 居住形態に大きな変化をもたらしたの



図9 川を渡るための伝統的手段：「索」（つる性植物で作られたひも状の編製品）（筆者撮影）



図10 下流地域の主要な換金作物「草果」(*Lanxangia tsaoko*)の畑（筆者撮影）

は政策という支配集団からの強制力だと考えられる。

今後においては、ドゥーロン族に対するさらなる現地調査を継続するほか、とりわけ上記の4つの共通点にもとづいて、民族誌からほかの小規模居住集団の関連記述を収集して、通文化的に考察することは課題である。

### 参考文献

北西功一

- 2003 「カメルーン南東部の狩猟採集民バカにおける貨幣経済の浸透」『山口大学教育学部研究論叢』53(1): 51-65。

服部志帆

- 2010 「森の民バカを取り巻く現代の問題—変わりゆく生活と揺れる民族関係」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』pp.179-206, 京都：京都大学学術出版会。

安岡宏和

- 2011 『バカ・ピグミーの生態人類学—アフリカ熱帯雨林の狩猟採集生活の再検討』京都：松香堂書店。

Althabe, G.

- 1965 Changements sociaux chez Pygmées Baka de l'est Cameroun. *Cahiers d'Etudes Africaines* 5 (20): 561-592.

- Gros, S.  
2014 The bittersweet taste of rice. Sloping land conversion and the shifting livelihood of the Drung in northwest Yunnan (China). *Himalaya* 34 (2): 81-96.
- Kelly, R.  
2013 *The Lifeways of Hunter-Gatherers: The Foraging Spectrum*. Cambridge University Press.
- Terashima, H.  
1985 Variation and Composition Principles of the Residence Group (Band) of the Mbuti Pygmies -beyond a typical/atypical dichotomy. *African Study Monographs. Supplementary issue* 4: 103-120.
- 宋恩常  
1980 『云南少数民族社会调查研究（上集）』昆明：云南人民出版社。
- 郑维川  
2001 『独龙族—贡山丙中洛乡小茶腊社(云南民族村寨调查)』昆明：云南大学出版社。

# 研究計画 B01 班 2019 年度研究活動

## 1. B01 班主催の学会セッション

第 8 回パレオアジア文化史学研究大会

2019 年 12 月 14 日(土) 10:30 ~ 17:15

(国立民族学博物館・第 5 セミナー室)

ワークショップ「東アジア-東南アジアにおける人類の拡散：生態資源と利用法の多様性からのアプローチ」

10:30-10:40 開会挨拶 (領域代表：西秋良宏)

10:40-10:50 ワークショップ趣旨説明  
(B01 野林厚志)

10:50-11:15 小野林太郎 (A02)、リクツァー・フエン  
テス、アルフレッド・パウリック (A02)

「東南アジアの不定形剥片とその機能——使用痕分析から見えてきた人間行動と技術の複雑性」

11:15-11:40 池谷和信 (B01)

「東南アジアの狩猟採集民からみた旧石器時代人の環境適応」

11:40-12:05 北川浩之 (A03)・奥泉舞桜

「気候適応および東アジア・東南アジアへの現生人類の拡散」

12:05-13:00 昼食

13:00-13:25 鈴木美保 (A01)

「石材資源開発と石器製作技術——後期旧石器時代の日本列島——」

13:25-13:50 金谷美和 (B01)・上羽陽子 (B01)・中  
谷文美 (B01)

「小石刃が卓越しない地域における植物資源の道具利用」

13:50-14:15 太田博樹 (B02)

「東・東南アジア以東における遺伝的多様性について」(仮)

14:15-14:45 招聘発表

王法崗・張文瑞 (河北省文物研究所)

「泥河湾盆地における 20 万年におよぶ古人類の痕跡」

14:45-15:00 休憩

15:00-16:15 総合討論

コメント：門脇誠二

「西アジアの新人定着期における資源利用行動」

16:15-17:00 特別発表

高畑尚之 (B02)・澤藤りかい (B02)・太田博樹 (B02)  
「ゲノムからみた現生人類集団の移動と分化と交雑」

2019 年 12 月 15 日(日) 10:00 ~ 17:00

(国立民族学博物館・第 5 セミナー室 / 第 7 セミナー室)  
公募研究

10:00-10:25 国武貞克 (A01)

「中央アジア西部における後期旧石器時代初頭 (IUP) 石器群の探求」

10:25-10:50 上峯篤史 (A01)

「東アジア鋸歯縁石器群の基礎的研究 (1)」

10:50-11:15 中沢 隆 (A02)、大澤桃子、門脇誠二  
(A02)、西秋良宏 (A01)

「新・旧石器時代の動物遺体に含まれるコラーゲンの質量分析のための新規化学処理法」

11:15-11:40 勝田長貴 (A03)

「湖沼堆積物を用いた最終氷期におけるモンゴル北西部の環境変動復元」

11:40-12:05 山根雅子 (A03)

「骨と炭化物の炭素 14 年代測定のための前処理についての検討」

12:05-12:50 昼食

12:50-14:00 ポスターセッション

14:00-14:25 田村光平 (B02)

「文化大進化のシミュレーションと文化多様性の尺度」

### 一般研究

14:25-14:50 山岡拓也 (A01)

「カラオ洞窟の 30ka の文化層から出土した石器の技術形態学的な特徴」

14:50-15:15 門脇誠二 (A02)、廣瀬允人、須賀永  
帰、東田和弘

「南ヨルダンのカルハ山旧石器遺跡群の近郊における新たな石材産地の発見」

15:15-15:30 休憩

15:30-15:55 藤木利之 (A03)・酒井恵祐・奥野 充  
「東ポリネシア・クック諸島アチウ島における約 2000

年間の植生変遷と人類到達年」

15:55-16:20 山田仁史 (B01)

「東南アジア神話の多層性」  
16:20-16:45 小林豊 (B02)・中村光宏 (B02)・若野  
友一郎 (B02)・青木健一 (B02)  
「popularity spectrum の理論と文化の 0,1 データ  
への応用について」  
16:45-17:00 閉会挨拶 (領域代表: 西秋良宏)

#### ポスターセッション

- P01 竹花和晴 (A01) 「ネアンデルタール人と彼等の死、特に埋葬と墓」  
P02 西秋良宏 (A01) 「みんぱくの矢と槍」  
P03 麻柄一志 (A01) 「内蒙古薩拉烏蘇遺跡出土の石器群について」  
P04 加藤真二 (A01) 「いくつかの事例からみる中国における後期旧石器の開始について」  
P05 高倉 純 (A01)・鈴木建治 「シベリアの後期旧石器時代石器群における石英・珪岩利用」  
P06 澤藤りかい (A01)・石田 肇 (A01) 「環境DNAから読み解く古環境と文化」  
P07 中川和哉 (A01) 「韓国の後期旧石器時代初頭の様相」  
P08 出穂雅実 (A02) 「モンゴル国ブルガン県トルボル 17 上部旧石器時代遺跡の発掘調査速報 (2019 年度)」  
P09 中沢祐一 (A02) 「共栄 3 遺跡の発掘成果: 北海道東北部における現生人類居住に関する考古学的調査」  
P10 近藤康久 (A03)・大西秀之 (B01)、池内有為、中島健一郎 「パレオアジア研究観調査の結果と学際性に関する考察」  
P11 長谷川精 (A03)、今岡良介、志知幸治、Niiden Ichinnorov 「サンギンダライ湖堆積物から復元するモンゴル北西部の MIS3 以降の古環境変動と植生変遷 (予察)」  
P12 北川浩之 (A03)・奥泉舞桜 「気候の地理的な違いを考慮した人類拡散モデルの構築」  
P13 田村 亨 (A03)・野口 淳・石井祐次・北川浩之 (A03) 「パキスタン Thar 砂漠堆積物の OSL 年代による石器年代の制約」  
P14 野林厚志 (B01) 「生業技術の変化の文化的解釈——ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」  
P15 藤本透子 (B01) 「移動する集団の行動パターンとその痕跡——中央アジア草原地帯の事例から」  
P16 彭宇潔・高木仁・野林厚志 (B01) 「パレオアジア民族誌 DB の構築に向けて (2) —— スンダ——

サフル生態圏における狩猟用具の素材と形状に着目して」

- P17 山中由里子 (B01)・田村光平 (B02) 「合成獣イメージの複雑性——その地理的分布」  
P18 中分遥 (B02) 「民話による文化情報伝達: 素朴動物学知識に関する計量分析」

## 2. B01 班主催のシンポジウム・講演会

新学術領域研究「パレオアジア文化史学」「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」研究計画 B01 講演会

開催日: 2019 年 9 月 12 日 (木)

場 所: 第 7 セミナー室

時 間: 13:30-15:30

講演者: Dr. Ben Marwick

(University of Washington)

講演タイトル: Moving on from Movius: Recent Palaeolithic discoveries in China, Vietnam and Myanmar

言語: 英語

## 3. B01 班主催研究会

### (1) 民族誌データベース構築 2019 年度研究会

#### 第 1 回

日 時: 2019 年 6 月 27 日

場 所: 国立民族学博物館 4 階事務室

参加者: 野林厚志、彭宇潔、高木仁

内 容: 民族誌 DB 構築に関する議論

#### 第 2 回

日 時: 2019 年 7 月 12 日

場 所: 国立民族学博物館 4 階事務室

参加者: 野林厚志、彭宇潔、高木仁

内 容: 民族誌 DB 構築に関する議論

#### 第 3 回

日 時: 2019 年 7 月 18 日

場 所: 国立民族学博物館 4 階事務室

参加者: 野林厚志、彭宇潔、高木仁

内 容: 民族誌 DB に入力する項目に関する議論

#### 第 4 回

日 時: 2019 年 10 月 31 日 (木)

場 所: 国立民族学博物館第一演習室

参加者: 野林厚志、丸川雄三、彭宇潔、高木仁

内 容: データベースの構築に関する具体的に議論と

検討

なった。

(2) 南アジア研究班 2019 年度研究会

B01 南アジア班 2019 年度第 1 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-6

日 時：2019 年 4 月 7 日(日) 10:00 ~ 17:00

出席者：上羽陽子、中谷文美

場 所：国立民族学博物館

内 容：昨年度に引き続き、現生人類の素材・道具利用について「線具」に焦点あて、現地調査の精査および民族誌の渉猟をおこない、植物素材による「線具」製作と利用の実態を検討し、今後のパレオアジア文化史学の研究調査方針について議論をおこなった。

B01 南アジア班 2019 年度第 2 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-7

日 時：2019 年 4 月 28 日(日) 10:00 ~ 17:00

出席者：上羽陽子、金谷美和

場 所：国立民族学博物館

内 容：西ティモール地域のヤシ科植物およびタケ科植物に関する道具利用について、現地調査でのデータの精査および、その利用の特徴について考察をおこない、今後の研究の展望に関する議論をおこなった。

B01 南アジア班 2019 年度第 3 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-8

日 時：2019 年 5 月 26 日(日) 10:00 ~ 17:00

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館

内 容：西ティモール地域のヤシ科植物およびタケ科植物に関する道具利用について、現地調査でのデータの精査および、その利用の特徴について考察をおこない、今後の研究の展望に関する議論をおこなった。

B01 南アジア班 2019 年度第 4 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-9

日 時：2019 年 7 月 29 日(月) 10:00 ~ 17:00

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館

内 容：アッサム地域のヤシ科植物およびタケ科植物に関する道具利用について、現地調査でのデータの精査および、その利用の特徴について考察をおこない、今後の研究の展望に関する議論をおこ

B01 南アジア班 2019 年度第 5 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-10

日 時：2019 年 9 月 10 日(火) 10:00 ~ 17:00

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館

内 容：アッサム地域のヤシ科植物およびタケ科植物に関する道具利用について、現地調査でのデータの精査および、その利用の特徴について考察をおこない、今後の研究の展望に関する議論をおこなった。

4. B01 班班会議

日 時：2019 年 8 月 6 日

場 所：国立民族学博物館第 4 演習室

参加者：B01 班班員

## 研究計画 B01 班 2019 年度研究業績

### 出版物 Publications

#### 編著書 Books

- 池谷和信編 (2020) 『ビーズでたどるホモ・サピエンス史—美の起源に迫る』 京都：昭和堂。
- 菊田悠 (2019) 『ウズベキスタン陶芸紀行』 共同文化社。
- Ayami Nakatani ed. (2020) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, Lanham et al.: Lexington Books.
- 山中由里子編・国立民族学博物館監修 (2019) 『驚異と怪異—想像界の生きものたち』 河出書房新社。
- 山中由里子・山田仁史共編 (2019) 『この世のキワー〈自然〉の内と外』 勉誠出版。

#### 雑誌論文 Journal articles

- 山田仁史 (2019) 「神話と万葉集：月・若水・脱皮」『現代思想』 47(11): 234-245。
- 山田仁史 (2019) 「台湾原住民における人生儀礼」『台湾原住民研究』 23: 51-80。
- Yamada, Hitoshi (2019) Negative origin of a cultural trait? Myths of the loss of literacy. *Etnografia*, 3(5): 42-56.
- Yamada, Hitoshi (2019) Comparative Mythology Synchronic and Diachronic: Structure and History for Taryo Obayashi and Claude Lévi-Strauss. *Comparative Mythology*, 5(1): 55-65.

#### 書籍掲載論文 Book chapters

- 池谷和信 (2020) 「日本で華開くビーズ文化—ガラスビーズ・ビーズバッグ・ビーズ織り」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史—美の起源に迫る』 289-299 頁、京都：昭和堂。
- 池谷和信 (2020) 「序論 人類とビーズ」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史—美の起源に迫る』 2-21 頁、京都：昭和堂。
- 池谷和信・那須浩郎 (2019) 「変わりつつある野菜と人の関係」『ビオストーリー』 32, pp.8-13、生き物文化誌学会。
- 黒澤弥悦・池谷和信 (2019) 「変わりつつあるイノシシと人の関係」『ビオストーリー』 31, pp.8-13、生き物文化誌学会。

池谷和信 (2019) 「犬を使用する狩猟法 (犬獵) の人類史」大石高典・近藤祉秋・池田光穂編『犬からみた人類史』 46-67 頁、勉誠出版。

Ayami Nakatani (2020) “Introduction: Asian Handmade Textiles as Fashionable Traditions” in *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, edited by Ayami Nakatani, pp.1-16, Lanham et al.: Lexington Books.

Ayami Nakatani (2020) “Listing Cultures: Politics of Boundaries and Heritagization of Handwoven Textiles in Indonesia” in *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, edited by Ayami Nakatani, pp.79-98, Lanham et al.: Lexington Books.

Yoko Ueba (2020) “Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India” in *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, edited by Ayami Nakatani, pp.235-251, Lanham et al.: Lexington Books.

Miwa Kanetani (2020) “Weaving Knowledge in Depopulated Communities: Conservation of Wisteria Fiber Textiles in Kyoto, Japan” in *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, edited by Ayami Nakatani, pp.137-153, Lanham et al.: Lexington Books.

野林厚志 (2019) 「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究—狩猟方法を中心に」『第12回台日原住民族研究論壇』 pp.208-225、台北：国立政治大学原住民族研究中心。

野林厚志 (2020) 「台湾原住民族の文化の多様性—ビーズにみる過去と現在」池谷和信編『ビーズでたどるホモ・サピエンス史—美の起源に迫る』 pp.241-255、京都：昭和堂。

藤本透子 (2020) 「中央アジア草原地帯におけるコミュニティの再編と維持—カザフのアウルに着目して」本村真編『辺境コミュニティの維持—島嶼、農村、高地のコミュニティを支える「つながり」』 pp.179-215、那覇：ボーダーインク社。

山田仁史 (2019) 「犬祖神話と動物観」大石高典／近藤祉

- 秋／池田光穂（編）『犬からみた人類史』131-158頁、勉誠出版。
- 山田仁史（2019）「李維史陀與大林太良：神話的構造與歷史」（陳宣聿譯）『第二屆東亞民俗文化與民間文學論壇：東亞各國民俗文化與口傳文學的交流及互動』126-136頁、首爾：延世大學校。
- 山中由里子（2019）「自然界と想像界のあいにある驚異と怪異」山中由里子・山田仁史共編『この世のキワー〈自然〉の内と外』4-16頁、勉誠出版。
- Yuriko Yamanaka with the collaboration of Isabelle Draelants (in press) “How to Uproot a Mandrake: Reciprocity of Knowledge between Europe, the Middle East, and China”. In *Les échanges culturels aux Moyen-Age: du dialogue à la construction des cultures*, Hanno Wijsman, Marc H. Smith, Benoît Grévin, On Egawa, Megumi Tanabe eds., Editions de la Sorbonne, 2019.

#### その他の出版物 Other publications

- 池谷和信（2019）「ビーズに秘められた可能性(6) 生き物の歯」『Bead Art』Vol.29、66-69頁、The JAPAN BEAD SOCIETY。
- 池谷和信（2019）「ビーズに秘められた可能性(7) 多様な素材」『Bead Art』Vol.30、60-63頁、The JAPAN BEAD SOCIETY。
- 池谷和信（2019）「ビーズに秘められた可能性(8) ビーズバッグ」『Bead Art』Vol.31、66-68頁、The JAPAN BEAD SOCIETY。
- 池谷和信（2020）「主役なき土地権運動—カラハリ先住民」『季刊民族学』44(1): 56-63、千里文化財団。
- 池谷和信（2020）「サン、ソマリ」信田敏宏編『特別展先住民の宝』91-106頁、国立民族学博物館。
- 上羽陽子（2019）「糸での表現、布への表現」『月刊みんなく（2019年11月）』、pp.16-17、国立民族学博物館（2019.11.1）。
- 上羽陽子（2019）「バスケットリーとものづくり」『月刊みんなく（2019年7月）』、pp.2-3、国立民族学博物館（2019.7.1）。
- 上羽陽子（2019）「編み材・組み材をうみ出す」『月刊みんなく（2019年7月）』、pp.8-9、国立民族学博物館（2019.7.1）。
- 中谷文美（2020）「伝統染織とは何か—伝統と革新、そして継承」『民博通信 Online』pp.8-9。
- 山田仁史（2019）「東南アジア」『世界の神話 英雄事典』吉田敦彦（編）: 328-345、河出書房新社。
- Yamada, Hitoshi（2019）Comment to: The Etnos Archipelago: Sergei M. Shirokogoroff and the Life History of a Controversial Anthropological Concept, by David G. Anderson & Dmitry V. Arzyutov. *Current Anthropology*, 60(6): 765-766.

#### 講演・学会発表 Conference presentations

##### 招待講演 Invited presentations

- 野林厚志（2019）「肉食行為の人類史」南開大学、天津、中国、12月20日。
- 山中由里子（2019）「めでたい!? めでたくない!? 世界の人魚」（令和元年度齋宮歴史博物館歴史講座—第2回）齋宮歴史博物館、2019年9月7日。

##### 口頭・ポスター発表など Oral and poster presentations

- 池谷和信（2020）「世界のハンターと動物」ヒトと動物の関係学会・関西シンポジウム「狩猟採集の現代」、国立民族学博物館（2020年2月1日）。
- K. Ikeya（2020）“Hunter-gatherers and culture in Africa: Bow and arrows as an index of foraging behaviors” The SOKENDAI Advanced Science Synergy Program (SASSP) Minpaku Seminar on the Integrated Anthropology, National Museum of Ethnology（2020年1月31日）。
- 池谷和信（2019）「東南アジアの狩猟採集民からみた旧石器時代人の環境適応」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14-15日（予稿集4頁）。Ikeya, K.（2019）Environmental adaptation of prehistoric hunter-gatherers: From the perspective of contemporary hunter-gatherers in Southeast Asia. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019 (Proceedings, p.5)。
- 池谷和信（2019）「人類は何を食べてきたか？—フィールドワークから探る肉食の30万年」大手町アカデミア・人間文化研究機構コラボ、読売新聞ビル、東京。（2019年12月4日）
- 池谷和信（2019）「装いの文化誌—アフリカのビーズに注目して」『国立民族学博物館コレクション 世界のかわいい衣装』ギャラリートーク、阪急うめだギャラリー（2019年11月22日）。
- 池谷和信（2019）「1960年の五木村の暮らし—佐々木高明氏の写真から—」熊本県五木村伝承館（2019年11月2日）。
- 池谷和信（2019）「日本の山村研究の最前線—佐々木高明氏の写真からの展望—」北東アジア地域研究プロ

- ジェクト・民博拠点月例会、国立民族学博物館（2019年10月29日）。
- K. Ikeya (2019) “Introduction” Minpaku Workshop “Hunter-gathers in Asia: Ecological adaptation and social relationships” National Museum of Ethnology (2019年10月19日)。
- K. Ikeya and A. Prasetyo (2019) “Hunter-gatherers in Indonesia” Minpaku Workshop “Hunter-gathers in Asia: Ecological Adaptation and Social Relationships” National Museum of Ethnology (2019年10月19日)。
- 池谷和信・高木仁「趣旨説明」生き物文化誌学会第75回例会「ウミガメの文化誌」、須磨区民センター（2019年9月21日）。
- K. Ikeya and S. Kadowaki (2019) “Adaptive strategy to dryland among Paleolithic hunter-gatherers: ethno-archaeological approach of using water and animals in southern Jordan” INQUA (The International Union for Quaternary Research), The Convention Centre Dublin, Ireland. (2019年7月30日)。
- 池谷和信 (2019) 「営みにさぐる「ヒトらしさ」」トークイベント「ヒトってなんだ??—ホモ・サピエンスの誕生から文化の獲得まで」、国立科学博物館（2019年5月25日）。
- 池谷和信 (2019) 「カラハリ狩猟採集民における物質文化の変容：狩猟具に注目して」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学（2019年5月18日）。
- 池谷和信 (2019) 「アジアの狩猟採集民の多様性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11-12日（予稿集18頁）。Ikeya, K. (2019) Cultural diversity among Asian hunter-gatherers. The 7th Conference on Cultural History of Paleo-Asia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019 (Proceedings, p.19)。
- 池谷和信 (2019) 「企画展『ビーズ—自然をつなぐ、世界をつなぐ—』民博 vs. 科博」講演会、国立科学博物館（2019年4月27日）。
- 池谷和信 (2019) 「認知革命とビーズ」みんなのウィークエンド・サロン—研究者と話そう、国立民族学博物館（2019年4月21日）。
- 金谷美和・上羽陽子・中谷文美 (2019) 「小石刃が卓越しない地域における植物資源の道具利用」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』、p.10 (2019.12.14)。
- M. Kanetani, Ueba, Y., and A. Nakatani (2019) “The use of plant resources for tools in regions without the development of bladelet technology” The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, p.11 (2019. 12. 14)。
- 上羽陽子・山岡拓也・中谷文美・金谷美和 (2019) 「道具資源としての植物利用の多様性—ヤシ科植物の事例から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』、p.20-21 (2019. 5. 11)。
- Ueba, Y., T. Yamaoka, A. Nakatani, and M. Kanetani (2019) “Variation in plant resources used in making implements: the case of Palmae” The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, p.22-23 (2019. 5. 11)。
- 上羽陽子 (2019) 「バスケットリー—ものづくり—人類の「線具」利用」2019年度 第2回来館者のニーズに応えるためのMMPステップアップ講座 於：国立民族学博物館（2019. 6. 19）。
- 大西秀之 (2019) 「アムール川流域におけるナーナイ系住民の漁撈活動：GIS調査データを中心に」『日本シベリア学会第5回研究大会』同志社女子大学今出川校地、2019年6月8-9日。
- Nobayashi, A. (2019) ‘Historical Ecology of Bird Augury in Austronesian Culture’. *Human-bird Entanglements in the Pacific Anthropocene*, AAA/CASCA Annual Meeting. Vancouver Convention Center, Canada, 2019. 11. 20.
- 野林厚志 (2019) 「ハルマヘラ島における生態資源利用」みんなの国際ワークショップ『アジアにおける狩猟採集民—生態学的適応と社会関係』国立民族学博物館、2019年11月19日。
- 野林厚志 (2019) 「台湾原住民族の生態資源獲得の技術に関する研究—狩猟方法を中心に」『第12届台日原住民族研究論壇』宜蘭縣史館、台湾、2019年9月3日。
- 野林厚志 (2019) 「ワークショップ趣旨説明」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14-15日。
- Nobayashi, A. (2019) Introduction for Workshop. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019.
- 野林厚志 (2019) 「生業技術の変化の文化的解釈—ハルマヘラ・ガレラ族の漁船の形態からの考察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14-15日（予稿集79頁）。
- Nobayashi, A. (2019) Cultural interpretation of changes in subsistence technology: Consideration of the Galelan

- fishing boats in Halmahera. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14–15, 2019 (Proceedings, p.80).
- 野林厚志・高木 仁・彭 宇潔 (2019)「パレオアジア民族誌 DB の構築に向けて(1)—狩猟技術データ投影の試行」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11–12日(予稿集42頁)。
- Nobayashi, A., H. Takagi, and Y. Peng (2019) Constructing PaleoAsia Ethnography DB (1): a trial for projection of hunting technology. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11–12, 2019 (Proceedings, p.43).
- 小林 豊・野林厚志・中村光宏 (2019)「0,1ベクトルモデルはデータと比較可能か?」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11–12日(予稿集24頁)。
- Kobayashi, Y., A. Nobayashi, and M. Nakamura (2019) Can 0,1-vector models be compared to data? The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11–12, 2019 (Proceedings, p.25).
- 近藤康久・大西秀之・池内有為・中島健一郎 (2019)「パレオアジア各分野の研究観に関するオンサイト調査」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11–12日(予稿集68–69頁)。
- Kondo, Y., H. Ōnishi, U. Ikeuchi, and K. Nakashima (2019) On-site survey on the research mind-set of researchers from different fields in the PaleoAsia Project. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11–12, 2019 (Proceedings, p.70).
- 近藤康久・大西秀之・池内有為・中島健一郎 (2019)「パレオアジア研究観調査の結果と学際性に関する考察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14–15日(予稿集71頁)。
- Kondo, Y., H. Ōnishi, U. Ikeuchi, and K. Nakashima (2019) Results of an on-site survey of the research mind-set of the PaleoAsia project and its interdisciplinarity. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14–15, 2019 (Proceedings, p.72).
- Peng, Y. (2020) Residence styles among small-scale societies: cases from central Africa and southeastern Asian. *Society for Cross-Cultural Research Conference 2020*. Seattle, US, 28th February 2020.
- 彭宇潔 (2019)「狩猟活動の季節性1：狩猟対象動物に着目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11–12日(予稿集77頁)。
- Peng, Y. (2019) Seasonality of hunting (1): cross-cultural research on target animals. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11–12, 2019 (Proceedings, p.78).
- 彭宇潔・高木仁・野林厚志 (2019)「パレオアジア民族誌 DB の構築に向けて(2)—スンダーサフル生態圏における狩猟用具の素材と形状に着目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14–15日(予稿集83頁)。
- Peng, Y., H. Takagi, and A. Nobayashi (2019) Constructing a PaleoAsia Ethnography DB (2): Materials and morphology of hunting tools in the Sunda-Sahul area. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14–15, 2019 (Proceedings, p.84).
- 藤本透子 (2019)「中央アジア草原地帯における肉の共食の社会的意味」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11–12日(予稿集75頁)。
- Fujimoto, T. (2019) The social meaning of the communal consumption of meat in the steppe zone of Central Asia. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11–12, 2019 (Proceedings, p.76).
- 藤本透子 (2019)「移動する集団の行動パターンとその痕跡—中央アジア草原地帯の事例から」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14–15日(予稿集81頁)。
- Fujimoto, T. (2019) The nomadic group's behavior patterns and its vestige: A case study of steppe zone in Central Asia. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14–15, 2019 (Proceedings, p.82).
- Toko Fujimoto (2019) “Etnologičeskoe issledovanie Bayanaul'skogo regiona s vzglyada yaponskogo issle-

- dovatelya” (バイナウル地域の民族学研究—日本人の視点から)、International Roundtable Discussion “History and Culture of the Great Steppe”、パヴロダル教育大学、パヴロダル市 (カザフスタン)、2019年7月24日。
- Toko Fujimoto (2019) “Perspektivy etnograficheskogo issledovaniya kazakhov v Yaponii: Altaiskie materialy v Natsional’nom muzee etnologii” (日本におけるカザフ民族学の展望—国立民族学博物館のアルタイ資料—)、International Roundtable Discussion “Altay in History and Culture of the Great Steppe”、東カザフスタン技術大学、ウスケメン市 (カザフスタン)、2019年7月19日。
- 山田仁史 (2019) 「東南アジア神話の多層性」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14-15日 (予稿集44頁)。Yamada, H. (2019) Multiple layers in Southeast Asian myths. The 8th Conference on Cultural History of Paleo-Asia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019 (Proceedings, p.45).
- 山中由里子・田村光平 (2019) 「合成獣イメージの複雑性: その地理的分布」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第8回研究大会』国立民族学博物館、2019年12月14-15日 (予稿集85頁)。Yamanaka, Y. and K. Tamura (2019) Mapping the complexity of composite creatures. The 8th Conference on Cultural History of PaleoAsia, National Museum of Ethnology, Osaka, December 14-15, 2019 (Proceedings, p.86).
- 山中由里子・田村光平 (2019) 「合成獣イメージの構成要素コード化に関する試験的研究」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第7回研究大会』名古屋大学、2019年5月11-12日 (予稿集79頁)。Yamanaka, Y. and K. Tamura (2019) Pilot study on the coding of composite creature parameters. The 7th Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 11-12, 2019 (Proceedings, p.80).
- 山中由里子 (2019) Boundaries of the ‘natural’ and ‘supernatural」『この世のキワー自然と超自然のはざま』、国立民族学博物館、2019年11月24日。
- Yuriko Yamanaka (2019) Witness of Wonders: Fragmented, Recycled, and Reorganized Alexander Narrative in Mediaeval Persian Encyclopaedia. *There was one, there wasn't one: Modalities and challenges of the narrative in the Persianate world*, June 27 - Friday, June 28, 2019, Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Auditorium de la Bulac.
- 山中由里子 (2019) 「珍獣・霊獣・幻獣・怪獣—人はなぜモンスターを想像するのか?」みんなくゼミナール、国立民族学博物館、2019年10月19日。

PaleoAsia Project Series 28  
パレオアジア文化史学  
—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—  
Cultural History of PaleoAsia

---

発行日：2020年3月30日

編者：野林厚志（「パレオアジア文化史学」B01班研究代表者）

編集：彭宇潔（「パレオアジア文化史学」B01班研究協力者）

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館 TEL. 06-6876-2151

発行：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度

「パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—」（領域番号1802）

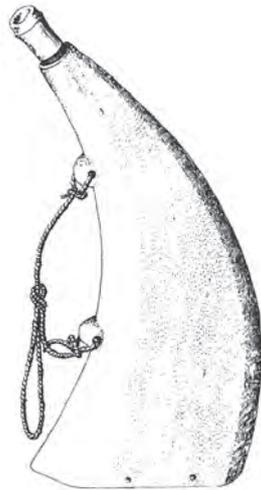
計画研究 B01班（研究課題番号 16H06411）

I S B N：978-4-909148-27-8

印刷・製本：株式会社遊文舎

〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31

TEL. 06-6304-9325



---

文部科学省科学研究費補助金  
新学術領域研究（研究領域提案型）  
2016-2020  
パレオアジア文化史学

---

計画研究 B01 班 2019 年度 研究報告